

---

# 鬼畜チェイス

夏空風癒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼畜チエイズ

### 【Nコード】

N37080

### 【作者名】

夏空風癒

### 【あらすじ】

とある国の（激しくDSな）鬼畜將軍と、（ちよつと）ちびでお腹の中まで真つ黒魔術師の少女が織りなす、何だかいるいる間違い過ぎた麗しき恋愛追いかっこ。という訳で、將軍シグマの魔の手から逃げるためには、手段を選んでいられないラグナ・キア。しかしその行く先々で頼らざるを得ない人々は、裏社会を牛耳る男装の麗人・幼馴染のスイツティシャを始め、スキモノ・ツワモノ・ゲテモノ揃い！ 逃げなかつた方が良かったのか！？ 長いものには巻かれるべきか！？ 思考のドツポにはまる暇なく、彼は追いか

てくるのです

逃げるしかねえではござえませんか!?!?

## prologue：ラゲナ・キア

初め、少女はそこそこの裕福な商家の娘でありました。

美しい母と優秀な商人である父親を持ち、兄妹にも恵まれて、少女はすくすくと育っております。

少女は仕事に行く父親の後ろにくっついては商談を眺め、そのうち駆け引きも覚ええました。少女は母がそうであるようにとても気丈で、また父の性格からか、堂々たる様でありましたので、取引先の商人からも認められておりました。

しかしある時、商談からの帰り道で、少女と父親は賊に襲われてしまいます。

父親の雇った護衛は二人を守ろうとしましたが、ちょっと気を緩めた隙に、少女が賊に攫われてしまいました。

父親は追おうとしましたが、仲間がそれを引き留めます。

ああなれば少女はもう助からない、助かったとしてもひどい目にあっていずれば自ら命を絶つだろう……何より、今の自分たちには賊と争うだけの力がない、と、父親を説得しようと思いました。

そこに護衛も加わってきました。

ご存じの通り、人買いが前々からこの辺りでは横行しています。

お嬢様のことは残念だと思えますが、取り戻すことは不可能でございます。ならば、『買い戻す』という形が一番確実かと、と護衛は進言します。

父親は泣く泣く少女を追うことを諦め、後に商会から方々に手を

尽くして少女の行方を探しましたが、しかし、少女は見つかる事は  
ありませんでした。

何故ならば少女を攫った賊は、少女を売る前に別の第三者から襲  
撃を受けて、奴隷商人の所に辿り着けなかったからです。

この第三者こそが、実は少女の運命を大きく狂わせていくのです  
が……さて、この人物がまた癖のある者でありました。

そのため少女は、少女の父親どころか、本人ですら予想もしてい  
なかつた人生の分かれ道へと足を踏み入れる事になってしまいます。

その少女こと、ラグナ・キア。

一体、彼女は未来でどのような軌跡を描いたのでありましようか。

prologue: ラゲナ・キア (後書き)

つづつづしたので何かはじめてしまいました。

## chase・01：とにかく逃げよう

「てめえら人間のクズでござえますね」

年頃の娘にあるまじきドスの効いた言葉が、潤った唇の隙間から漏れた。

しばらく前。

自分のものではないベッドと掛け布の間に挟まって、ひたすら悶々としていたのは、数えて大体五時間ほど前のことだった。

この状況をいい加減に何とかしないと一大決心をしたのは、それから三十分後。

思い立って即行動した自分は正しかった。あと数分あの部屋から逃げ出すのが遅ければ、きつとまた奴の思うままに部屋で侍女たちに囲まれていたことだろう。

だが少し待とうじゃあないか、ラグナ・キア？

果たして自分、今幸せか？

「ふう、う」

吐いた息に無意識に力がこもる。

とん、とん、と、リズムカルに肩を叩くのはそこら辺に転がっていた棒切れだ。

しかし侮るなかれ。このラグナにかかればただの木の棒であろうが、一流の魔術師の杖並みに扱ってご覧に入れよう。最も、杖にす

るにしては底力からして低いので、やる気を出さない限りは魔法の威力は軽く相手をノックアウトする程度に留まるのだが。

それでも、今回の使用目的の用は十二分に事足りた。証拠に、足下には倒れ伏した兵士がうず高く積み重なって山を為している。

上官である“奴”の手によって、訓練が地獄に変わることが何よりも恐ろしいという彼らは、己の命と明日を守るためには手段を選ばない。それは、地獄を回避するためなら何をしてでも少女一人を捕らえて生け贄に差し出す、と言い切らせるほどのものらしい。

これを聞いただけでも“奴”の外道の程が垣間見える。

というより、どれだけ鬼畜なのだあのボケ。

そんなやり方でも王国きつての精鋭部隊を生み出したというのだから腕は確かだろうが、間違はなくあまり尊敬したくはない部類のワースト3には入っている。現在その首位を強奪しようと、ラグナの脳内で虎視眈々と彼は目を光らせていた。

「……てめえら全員の言い分は分かりました。が、」

びくつ、と地面に熱い求婚をしている彼らの身体が恐怖に跳ね上がる。

その様子をラグナは極めて軽い目で見下ろして、

「乙女一人の捕獲に大の男二十人がかりとは。……てめえら、兵士と呼ぶ呼ばない以前に人間のクズでござえますね」

と、ここで冒頭のセリフに戻るのである。



「打ちのめした挙げ句に言うにとしては、なかなか容赦がないね、レ  
デイ」  
「ん」

後方からの声に、ラグナは目だけを動かした。

兵士がことごとく打ち倒された現場に、その人物は遅れてや  
つて来た。

品の良いライトブルーの服と見るからに高級なホワイトコートに  
身を包み、片肘を抱えてうっとり微笑む“彼”のサファイアの目  
には、面白そうな光が灯っていた。

「同情でもするんですか？ スイート」

「いや？ ボクは君に呼び出されてさっき来たばかりだから何も知  
らなかつたよ。まあ、事情は大体聞いて分かつたけどね」

スイートことスイツティシャ・イアル・ペンネは、オールバック  
にした淡い紫の髪の毛をかきあげると、薄い桜色の唇を引き延ばし  
て笑い、兵士たちに言い放った。

「君たちホントに人間以下だね。畑の肥やしにでもなつた方がまし  
なんじゃない？」

「それ、遠回しにクソになれって言つてやがりますね、スイート」  
「うふふふ。ボクのお姫様に手を出したんだもの、痛い目に合っ  
てもらつて当然だよ」

「……甘いですね。私ならクソの中の八工にでもなつてると言いま  
すが」

「つくづく君ってひどいねえ」

笑みを更に深めて、スイートはラグナに手を差し伸べた。

「で？ ボクの所に来る気になつたかい、お姫様」

ラグナはすぐには答えなかつた。

くるりと後ろを振り向くと、はるか彼方からは土煙。

乾燥地帯であるこの辺りは見晴らしが良すぎて、のんびりと立ち

話をするにはあまりよろしくない。先ほど足元の彼らととつくりと話し合ったばかりなので、そろそろ失礼させてもらおうか。

半目になりながらつらつらと考えたラグナは、スイートに向き直る。

荒れ地の風が強い。視野の端では、自慢の髪が複雑に光を屈折させ、深緑、新緑の輝きを放って遊んでいる。

からりと晴れた青空の下で、ラグナは犬歯を剥き出し、笑った。

「残念ながら、そうするしかなくなつたようです。トンスラしやしよう、スイッティシヤ嬢」

「嫌ってほど厄介事がやってくる前に、ね」  
スイートは微笑んだ。

棒切れを掲げる。

奇跡のための模様を描く。

こんな所で終わりじゃない。これから追いかけつこは始まるのだ。  
逃げ出した鳥は自由を得るか。  
悪徳の男は最後に笑うか。

ああそつだ。

幸せじゃないよ、ラグナ・キア。

とんでもなく不幸せだ。

さて、転移の準備は整つたが……と、土煙の方を確認したラグナ

は、そこで恐ろしいものを目撃する。

迫ってきたのは車だった。迷彩模様が施された外装は、軍用のそれであると示している。

と、車の天蓋が開いて、気怠そうな顔で“奴”が身を乗り出す。肩に構えているのは

「グレネードランチャーって……」

無感情に蒼い瞳は言っている。

待ったなしだと。

「本気か!？」

流石にスイートも蒼褪あはれめた。

その横で、ラグナは既に行動に移っていた。

人差し指を銃器に向け、くるりと丸く円を描く。

『弾boomける!』

発射された弾が空中で派手に爆発する。

被害が及ぶ前に転移は発動し、二人は辛うじて逃げおおせた。

そしてここに至って、ついにラグナの世紀の大脱走劇は本格的に幕を開けたのだった。

chase-01:とにかく逃げよう (後書き)

12/09・登場人物の容姿の描写を変更しました。

## chase・02：その名も鬼畜將軍

シグマ・アルスミードという男は、ミゼット国の中でも特に優秀な将兵の一人だ。

僅か25歳という年齢で、一兵卒から少将という前代未聞の大出世を遂げた彼は、知謀策略においても老獪な猛者たちと肩を並べるほどの長がある。そのことは、一年前に内乱に次いで起こった他国からの侵略にて、彼の指揮系統にある部隊がどの戦闘においても結果的に勝利をもぎ取ったという功績が証明していた。

周辺諸国を震え上がらせた大国ミゼットの名は、この男一人が作り上げたと言っても過言ではない、とまでまことしやかに囁かれるほど。上將までもが彼には一目置いていい、続いて大將、中將らもシグマの計り知れぬ有用性に舌を巻かされるばかり。曰く、「元が少年兵ゆえ勉学にも良く励む。妬む暇すら与えてもらえない」とまで言わしめた。

しかし、同時にこれは恐ろしいことだ。シグマが指揮系統を一つでも握れば、芋づる式に他を巻き込んで戦局を一つも二つも塗り変えてしまう。彼はどの国から見ても喉から手が出るほど欲しい人材であり、また彼が寝返るということは国家が滅ぶということに等しいと言える。

ただし。その輝かしい栄光を丸ごとぶち壊すような欠点があるとラグナは思う。

性格が悪いのだ。

追いかけてつこにおいてのつけからグレネードランチャーをたかが二人に向かってぶっ放すような男。警級のサディスト。鬼と呼ぶ者がいるが、まさしくあれは鬼畜だ。

そんな男が英雄として祭り上げられるようでは、世も末だろう。

ゆえに、断固として主張する。

「あれは人の皮を被ったケダモノ、いえバケモノでござえますよ」

「……まあ、それには同意するけどね。ラグナ」

「何でござえましょうか」

「入れすぎじゃない？ お砂糖」

ぼとんぼとんぼとんぼとんぼとん、と、黒い水面に白い立方体が吸い込まれていく。

角砂糖を次々にコーヒーの中へ投入し、ラグナは八つ目を入れた所でようやく砂糖入れの蓋を閉め、小さなミルクの器の中身を丸ごとカップの中へと落とした。

衝撃のグレネードランチャー強襲から一刻ほど後、フィンドールという町に転移して現れたラグナとスイートは、スイートが前に知人から紹介してもらったというカフェに入っていた。

思い出すだに恐ろしい出来事に、未だに動悸の収まらない心臓を抱えたまま、石を飲みこんでしまった気分ではばらく水もろくに口ができなかった。

が、つい先ほど、ようやくとスイートが意を決して、コーヒー二つ、と店員に注文を出したのである。

「別にいいじゃござえませんか。私、コーヒーは苦手なんですよ」  
「それで激甘のミルクたっぷり、か。思いつきりお子様なカフェオレだね」

「喧しいでござえます、スイート」

「はいはい。……で？ 何であの鬼畜将軍が人の皮を被ったバケモノだった？」

「今自分で答えを言いましたね。本当に鬼畜でございましたよ恐ろしい。あのアホンダラは世の人間の敵です」

「まさか君がそこまで言い切るとは」

スイートは目を睜みはった。

「一体何をされたんだい？」

聞かれたラグナは、スイートに胡乱な目を向けた。

そつちに興味を持つか。

「聞きたいんでござえますか？ 精神に一生傷残りますよ」

「……………やめておこうか」

「冗談です」

さらつとラグナは笑う。

「ちよつと愛人やらされたんでござえますよ。行き倒れていたら拾われまして」

スイートの笑顔が凍る。

「……………愛人？ 行き倒れた？」

「あい」

「拾われて愛人にされた？」

「あい」

まさか。

スイートが呆然とした顔でそう呟いて、ラグナをじろじろと眺めた。

自分が一見するとまだ十七程度の少女に見える容姿であることは知っていたので、ラグナは何も言わずに黙っていた。

実際は二十一歳ともう立派な成人なのだが、背が平均より“やや低いのだ。さらには現在口に行っているカフェオレの例があるように、嗜好も子供っぽい。ラグナ自身自覚していることではあるが、まだまだブラックコーヒーの強烈な苦みには慣れられそうになかった。

さて、あれこれ考え、言葉の吟味を終えたらしきスイートの一言は。

「ひよっとしてシグマ・アルスミードはロリコンかい」

「いえ、あれはただの紛うことなき鬼畜です」

ロリコンもあるかもしれませんが。

言いながら、ラグナはふと眉を潜めた。

……本当にそうだったらどうしてくれよう、あの鬼畜？

「まあ本人の嗜好はどうでもいい。いずれにしても、君は早く逃げなくちゃいけないらしいし。將軍が『待ったなし』の電光石火攻撃を得意とするとは良く分かったからね」

「……実は時間差プレイ・放置プレイも得意だと言ったらどうするのでござえますか？」

「ふふ、だとすれば胸が高鳴る言葉だね。彼はあれかい、ボクのファミリィに喧嘩売ってるのかい？」

爽やかな笑顔でスイートはぱきん、と拳を鳴らす。

「このスイッティシャ・イヤル・ペンを敵に回したらどうなるか、ちよっと知ってもらおう」

「また“詐欺姫”の名前を売るようになりますよ、スイート」

ラグナが多少げんなりして言うと、スイートの笑みが深くなった。

麗人はゆっくりと、椅子の上で足を組む。

「望むところだ。ボクのお姫様<sup>ラグナ</sup>は君のおもちゃにはさせないよ、シグマ・アルスミード」

一世一代の大チェイスに、こうしてペinne家の男装の令嬢が



名乗りを上げた。

「ペンネ家の詐欺姫ですね。間違いないでありますよ。」

シグマが差し出した写真をちらりと見やつただけで、アイネ・グレイス副官は示された人物の正体を看破してみせた。

聞いたことのある名に、シグマはじつと副官を見た。

「ペンネの？」

「はい。ご説明しましょうか？」

「いや、いい。誰か分かれば十分だ。」

写真をポケットに収め、断った。

彼女は頷いてから、再び口を開いた。

「アルスミード少将。畏れながら申し上げますが、精鋭隊を愛人殿の捕獲に用いるのはおやめ下さい。戻って来た様子を拝見いたしました。あれでは二週間近くは使い物になりません。」

それはそうだろう、とシグマは内心でぼやいた。魔術師であるラグナが相手なのだから、アレが威力を惜しまなければ、今頃焼死体が二十は出来上がっていたところである。

しかも、例え威力を加減したとしてもすぐに動かれては意味がない。二週間動けない程度に消耗させるというのは、妥当な線だと思った。

自分が彼女の立場なら、無論全て殲滅だが。

彼女は全く甘い。自分を真に脅かす相手であるとシグマのことを認識していたなら、あそこで兵士らを殺すべきだったのに。

「そもそも魔術師などを困おつとなされた事が間違いなのであります。検査なども受けさせる必要があるので、任務失敗の処罰と称し

て訓練を課すのもしばらくお控え頂きたいのですが」

言われて、シグマは目を細めた。

火器等の武器と共に人類の知によって発展してきたものの、軍団とは明らかに一線を隔してしまった技術を扱う者たち、それが魔術師だ。

彼らは描き出した具体像の中に抽象を見出し、さらにそこへ世界と自らの精神を交わらせることで不可思議な現象を行使する。詠唱一つ、図画一つで様々な現象の実現を可能とするも、大なり小なりの精神感応のセンスが影響するために、使える人間は世界全体で見れば少数だ。

そんなただでさえ希少な存在を、一国の将軍が国力として利用するどころかただの愛人として困ったのだ。事実を知った時、グレイス副官が頭を抱えたのはまだシグマの記憶に新しい。

訓練の中止を求めた副官に、シグマは投げやりに返事をした。

「第一隊はおまえの管轄だ。……好きにすれば良い」  
事務机から腰を浮かし、扉に向かう。

「少将」

呼び止められて、シグマはグレイス副官を振り返った。

「……ラグナ殿をあまり苛こまれませぬよう。堪りかねたからこそ、彼女はお逃げになったのであります」

彼女の言葉に、すっと腹の中が冷える。

口角が音もなく吊り上がった。

「では、おまえが代わりをするか？」

「っ……。それは、」

露骨に肩を跳ねさせた部下を、冷えた目で一瞥し、

「冗談だ」

言い捨てて、シグマは副官の事務室を後にした。

「おまえは安心してその椅子にでも座っている、グレイス」

自分に痛めつけられるのは、愛玩具ラグナだけの特権だ。

休憩室に向かおうと、回廊を歩く。

今頃どこぞでぶるりと身を震わせているだろう少女のことを考え、くつくつと喉の奥で笑った。

荒れ地で銃器を向けた時の、あの青ざめた顔。

少女の怯えと恐怖が伝わってくるようで、思い出しただけでも身体体の芯をたまらなく刺激してくれる。

アレが泣く姿を見たい。

彼女が許しを請うて、顔を歪めて見上げてくる様子を想像する。

ああ、きつと美しい眺めなのだろう。

踏みつけて這いは蹲すらせても、極上の顔が見られるに違いない。

「ラグナ。私から逃げられるとでも？」

否。 逃がしはしない。

そう、おまえは、この私からは逃げられない。

執着？ 妄執？ いや、違う。

これは言うなれば、一つのシグマの“愛”なのだ。

ラグナを捕らえた後の予定を考えていると、不意に背後から声が届いた。

「少々將つ。よつ、意外と機嫌良さそうだな」

耳に飛び込んできた良く知る者の声に、シグマは緩んでいた口を引き結ぶ。「鬱陶うつとうしい奴が来た」と独りこちて、振り向いた。

「何の用だ、カリス准将」

ジェス・カリス 狙撃兵出身の戦友は、無邪気な笑いを浮かべてシグマの肩にがっちり腕を回してきた。

「いやあ別に。何か飼ってたペットに逃げられたっていうから……慰めに？」

問答無用で肩の拘束を外した。

「いらん。帰れ」

「帰らん。絡む」

半目を向けると、ジェスは大真面目な顔で腕を組んでこちらを見ていた。

「暇だ。付き合ってくれよ」

「……訓練はどうした」

「おお、そりゃもちろん副官共に任せてきたぜ。おまえじゃないかな、サバイバルなんてやらせんよ。おかげで第九師団の人気は前からずっと鰻上りだ」

ジェスはこう語るが、シグマ率いる第八師団への所属も兵によってはそれほど嫌厭けんえんされていない。訓練は確かに地獄だが、確実に実力をつけて上へと上がれるというメリットがあるからだ。

とはいえ、職務怠慢だな、と溜息を吐きそうになったのをシグマは堪えた。

「て訳でまあ、暇だから暇なんだ」

「訳が分からんな」

「心配して来たのは本当なんだぜ？ 慰めがいらんことは何となく分かったが。おまえ、ペット狩りで楽しんでるだろ」

「そう思うなら放っておけ」

「いやいやいや。こんな楽 面白そうなこと放っておけるか。俺とおまえの仲じゃないかあ、少将」

ぼん、と肩に手が置かれる。

「協力してやるぜ？ その代わりそっちのグレイスちゃん俺のトコにくれ」

「……ほっ？」

シグマは片眉を上げる。

一人分の人事異動で彼から長期の協力を得られるとは、ずいぶん  
と割の良い取引だが。

思案する雰囲気を感じ取ったのか、ジエスは浮き立った声を上げ  
た。

「いやあ、俺の周りの部下が男くさい奴ばかりでさ」

「おまえのところにもいるだろう、一人」

「いや、ありゃ俺の全生涯にかかるとる影だ。女と認める訳にはい  
かん」

ジエスは首を振りつつ、真剣な表情でそう語った。

因みに第九師団の紅一点と言われるリザ・カリス中佐は、その名  
の通りジエスの妹であり、大変な兄想いとして知られている（しか  
し愛が重すぎてろくに女と付き合いもできないとは本人の言である）  
。

「頼む、俺の軍に華と癒しをくれ。多少冷たくてもまたそこが良い  
んだ、妹より断然マシだ！」

「……グレイスをおまえの軍にやれば協力する、だったか？」

「そう！」

シグマは声を落として、ゆっくりとジエスの手を掴んだ。

「そつえば、おまえは誰と誰の仲だと言っていたのだったか」

「だから へっ!？」

一本背負い。不意打ちに為す術も無くジエスの身体が宙を舞った。

「うえぶしっ」

その場に誰かが居合わせていたなら、まず間違いなく肩をすくめ  
ただろう。

派手な音を立てて床に叩きつけられた准将の鳩尾に、踵をはめた<sup>かかと</sup>。

「グレイス副官は情を捨てきれん部分もあるが、おまえにやるほど  
無能ではない。慣れ慣れしさが相変わらずだな。いつその腹に風

穴でも開けてやるうか？ ん？」

「ははは……さすが鬼畜將軍。いつものドSっぷりで思わず安心しちまわあな」

足蹴にされたままジエスは空笑いをする。しかし次の瞬間には手品のようにシグマの足の下から抜け出て、ジエスは再びシグマと向き合う位置に立っていた。

「ふう、相変わらず技のキレが半端ないね。こっちは狙撃派で武術は得意じゃないってのに」

あっさり踏みつけから抜け出した男の言うことではない。

シグマは思いながら、もう一つ、別に働かせていた思考で答えた。

「協力はありがたくもらっておこうか」

「げえ」

途端にジエスの顔が顰められた。

「ち、結局タダ働きかよ」

「阿呆。誰がいつ報酬をやらんと言った」

懐から取り出した物をジエスに投げ、踵を返す。

「ん？ ……？ ……！？ シ、シグマ待ておいこれはまさか！？」

背後で放られたそれを受け取った彼は、しばらくしてから慌ててシグマを追いかけてきた。

「おまえ、何でペンネの詐欺姫の写真なんか持ってるんだよ！？」

「知りたければ手伝うことだな。その写真もくれてやる」

「手伝う、本気で手伝わせてもらいますっ！ だから教えてくれっ！」

シグマは歩みを止め、肩越しにジエスを見やった。

「ところでおまえ、詐欺姫といつ知り合った？」

「三ヶ月前、町で巻き込まれた事件でかちあって、そっから一目惚れだ！ いやあ、標的を万の手法で欺き下すというあの手練手管、まさに詐欺！ まさに芸術！ 是非妻にしたいね！」

「ああそうか」

胸を張るジェスに一つ頷く。

なら、一層こいつは扱いやすそうだ。

そう判断したシグマは、彼に本人が一番欲しい情報をくれてやった。

「スイツティシャ・イヤル・ペンネは逃げたラグナと一緒に行動している。ラグナを捕らえた後は、おまえにくれてやるう。煮るなり焼くなり好きにしろ」

「いやっほう、乗った！ 約束だぜ？ いやあ、グレイス副官で諦めようかと思っただけどんだ嬉しい誤算だ！」

「ああそれと、おまえの妹だが、こつちの軍に引き取ってやってもいい」

「ひゃっほう！」

「天使が微笑んでる気がする！」と狂喜乱舞しているジェスに、シグマはさらに付け加えた。

「その妹から逃げ切って、おまえに明日の朝日が拝めたらな」

「……………へ？」

ぴた、と踊るのをやめたジェスは、突然ぶるりと震えた。然もありなん、直接受けていないシグマですら感じるほどの殺気が、気温が零下に至るまで場の空気を冷却していた。

「……………あ」

ジェスの背後には、彼の可憐な天使<sup>いもつと</sup>、リザ・カリス中佐の姿がある。

慈愛の微笑みを最愛の兄に向ける彼女の手中で、首用拘束具から伸びた鎖が、じゃらりと音を立てていた。



c h a s e · 0 3 · 将軍閣下の腹の中 (後書き)

今までが短いのでちょっとびっくり長くしてみました)ちょっと二倍ぐらい  
?)

chase・04：コートは温かい

「まずは服だよな」

スイートの一言から、再び場所を移動して、ラグナは彼女の<sup>ねぐら</sup>の  
一つに案内されていた。

「ちっさいって時々不便だねえ。ボクのお古ってラグナに合うかな  
?」

のんびりと言いながら、スイートは次々とクローゼットの中から  
服を引っ張り出していく。

ラグナは「ちっさい」の一言に眉を潜めながら、着ていたコートを  
を脱いで、部屋に置いてあったベッドに放った。

「例えサイズが合っていようといまいと、この服でこれ以上行動す  
るのは嫌ですよ、スイート」

「まあ、軍のものだしね」

スイートは少し考えてから、躊躇<sup>ためら</sup>いがちに付け加えた。

「……ぶかぶかの、さ?」

ベッドに広がる派手な真紅の軍服を見下ろし、ラグナは溜息を吐  
いた。両肩についた二つ星は、明らかに軍の中でも階級が高い者  
すなわち、少将を表す。

シグマの部屋から出てきた時、着の身着のまま脱出できる状態  
ではなかったのだ。仕方なしに一着拝借してきたこのコートも、肩  
の二つ星の存在が怖くて、黒いストールを見つけて肩に巻いて隠し  
ていた。

「でもどうしようか。カフェにいた時も思ってたけど、その格好じ  
ゃあ……って、何だいそれ?」

着替えを見繕い終わったのか、スイートは立ち上がり　振り向きざまに顔を顰めた。

ラグナは息を呑み、さっと腕を自分の身体に回した。不覚だった。まさかコートを脱いだ時の自分の格好を一瞬でも忘れていたとは。

「見ないで下せますか？」

「……君の身体の『ソレ』については言及しないから安心して。ボクが聞きたいのは、逆に何で『ソレ』が見えるくらい下着が透け透けなのかだけだから」

「し、しっ……すけて、それは！　奴の侍女の仕業でござえますですよ！」

しどろもどろに言い返しながら、嫌でも全身が沸騰するのを感じた。同時に思い出されたあれやこれやの屈辱の数々に、ずっと締めていた涙腺が緩む。

「將軍つて侍女なんか雇ってるの？　へえ、ふうん……じゃあオリが使えるかなあ？　あの子、変装して紛れ込むのなんか得意だし」

そこなのか……。

あくまでも寝首をかくための隙に反応したスイートに、ラグナは肩を落とした。

「無駄でござえますよ。もともと彼女たちは私が来るまではあそこで働いていなかったようでしたから」

「……なるほど？」

微妙に残念そうな顔をしないでもらいたい。

ラグナは嘆息して、スイートに背を向けた。

背中に回していた腕を動かし、そっと『ソレ』に触る。

左の背。もつと言えば肩甲骨のあたりに、互い違いに組み合わせ合わせた二つの渦、という形で、拘束の意を表そうとした小さな刺青があるはずだった。

昔ラグナが奴隷にされかかった時に、途中まで彫られたものだ。

中央だけ彫ってから師に助け出されたので、ラグナの背に残りが刻

まれることはなかった。

「……お師匠様のところに、帰りたいでござえます」

ぼそりと吐き出した声に、後ろでコートを畳んでいたスイートが動きを止めた、ような気がした。

それから再び衣擦れの音がして、彼女が言葉を探すように深呼吸をするのが聞こえた。

俯いていたラグナの肩に、ふわりと、肌触りの良い服が覆い被さった。

「……トラクの町は、今は行かない方がいい。国境沿いにあることも影響して、最近、ミゼットの内情を探ろうとあちこちに間諜が出没しているらしいからね。下手に行動して君がシグマ・アルスミードの愛人だったと知れたら、ことだよ」

ラグナは大人しく、引つ掛けられた服に袖を通した。

「分かっているでござえますよ。言ってみただけですから、気にしないで下さいな」

愛人役とはいえ、一時は軍の上層にいたのだ。情報収集は決して怠っていないかったので、シグマの監視の目を縫っては、トラクがどんな情勢下に置かれているかはぼんやりとながら把握していた。

「気を付けて、ラグナ。少将がミゼットに忠義を立てているのは、決して愛国心からじゃないように思える。『アレは何を考えているか分からない』と父ですら時折零すほどだ」

「ペンネ当主にそこまで言わせるのでござえますか」

「まあ危険人物だろうね。場合によってはどの国に転がり込んでもおかしくない人間だ。だからみんな、チャンスが平等にあると信じこむ。テীরリス帝国なんかも彼の引き抜きに躍起になっているよ。うだし、軍部も常に神経を尖らせている。そんな彼が執着するものがあると知ったら……君は、有無を言ふ暇もなく勢力争いの道具にされ、最悪殺されてしまう。否応なしに巻き込まれるのは、運が悪かったとしか言いようがないけど。とりあえず、出会ったのが運の尽きだったと思っておけば傷も浅くて済むよ」

ぼん、と慰めるように肩に手を置かれる。

「それに將軍の傍に居続けても、遅かれ早かれ君の奪い合いが始まっていた。相手の出鼻をくじくという最高の形で少將の下から出て来られたと思うよ？」

「……ですが、そうなる私は平穩な生活はできるでしょうかね？」  
「できるよ。ラグナなんだから」

スイートが答えた時、ラグナは腰までのズボンを履き終えたところだった。

「……意外とぴったりだね。胸周り以外は」

「一言余計でござえますよ？」

ずっとコートの胸ポケットのペンに手を伸ばすと、空笑いをしながらスイートは目を細めた。

「ごめんごめん。でも後のことを考えるとね。やっぱり細かい所は測らせて」

どこから取り出したのか、メジャーがスイートの手に登場する。ラグナの後ろに回り込むと、身頃などを測り始めた。

先ほどからやけに気にされている胸囲にくると、ん、とスイートが眉を寄せた。

「……ひよつとして、君着やせするの？ 思ったより何か「わあああーっ、わああーっ!？」」

さつとメジャーを取り上げ、ラグナは軽く発狂した。

「……誰も聞いている人なんか居ないよ？」  
「私が聞きたくないんでござえますよ！」

息を荒げてスイートに怒鳴ると、しゅる、とメジャーを巻き直す。「その割にボクの記憶が確かなら、自分に合いそうな服はサイズ見ながら選んでるよね」

半目の友人からの確認に、うつと詰まる。

スイートはしばらく手をこまねいてラグナを見下ろした後、ぽつりと、

「そついえば……將軍は君の身体つき見たの？」

顔が爆発した。

次の瞬間、かの鬼畜將軍もかくやという運動能力を發揮し、気付けば問答無用でスイートの頭を締め上げている自分がいた。

「おめえ様はつ……言つて良いことと悪いことの区別がつかねえんでござえますかっ!？」

「ごめん、ごめんつて！ 出来心だから！ 化粧で服汚れちゃうよ!？」

ひとしきり互いに揉めた後で、ぜえはあと上がった息を吐いた。

「……馬鹿なことしました」

「いいんじゃない？ グレネードやら將軍の話やらで滅入つてたんだし」

ふいーつ、と、妙な音を立ててスイートはベッドに倒れ込んだ。

「服がしわになりますよ」

「いいよもう……今日一日だけで何だか疲れたし。逃走一日目なのに疲れるのもアレだし」

疲れた声を聞いて、ラグナはスイートにならつて彼女の横に倒れてみる。ぼすんとばねが軋み、妙な余韻を味わつた後、言つてみた。「……しばらく世話になります」

「今更だねえ、それ」

吹き出したスイートは寝返りを打つてラグナに微笑みかけた。

ベッドに寝転がった途端にとろとろと睡魔が襲ってくる。ラグナの塞がりかけている目を見て、スイートが忍び笑いを漏らす心配がした。

「ラグナ、ラグナ。無理に起きようとしなくていいよ。白目剥いてる」

「うるさいでござえます……んむ」

言い返しながらも、言葉に甘えることにする。

手近に掛け布の端を見つけて、引き寄せて体に巻きつけると、それほど時間をかけることなく眠りに落ちていた。

「……ラグナ？ 巻いてるのって將軍のコートだよ？」

スイートの言葉は、もう、耳に入っていない。

## chase - 05 : 詐欺姫の二十三シール

「おまえ、本当にいたぶり甲斐のある奴だな」

発言者である奴は、穏やかに笑ってラグナの頬を愛撫した。ぞわぞわと悪寒が背筋を走る。強烈に嫌な予感を感じたその時、顎をつつ、となぞっていた手がラグナの首を掴んだ。

ラグナの首が細いのではない。奴の手指が大き過ぎるのだ。彼の手に力がこもった。長い指の一本一本が首に食い込み、気道が潰れたのが分かった。

かはり、と声にもならぬ息を吐き出す。

呼吸を奪われ、意識が遠くなったラグナを見つめ、奴は喉の奥を低く震わせた。

この、S<sup>サド</sup>が。

相手を喜ばせると分かっているながら、眩かすにはいられない。

案の定、奴は先ほどの穏やかさなど欠片もなく、獰猛に口の端を吊り上げた。

顔が近づく。

「ラグナ？」

ラグナの頬に唇を寄せ、囁いてきた。

「逃げたいか。この、私から」

世界が白く飛びかけている。そろそろ意識を失うはずだったが、だが、寸前に心得ていたように首を解放される。

本当に、憎らしいほどに鬼畜だ。

こうして喘ぐように呼吸をすることすら、何やら妙な快感を覚えさせられてきた気がする。



「ラグナ 捕らえられた哀れな鳥」

ひどく痛めつけてくる癖に、名前を呼ぶ時のその声はたまらなく低くて甘い。必死に空気を取り込む中で言われたものだから、何やら頭の中がぐちゃぐちゃとかき乱されて陶然としてくる。

「……明日、籠の扉を開けておこつ」

耳元で奴が囁く。目を、見開いた。

「逃げればいい。私の手の届かない所まで行ってみせる……おまえは時々、予想外に楽しい」

楽しい？

たったそれだけの理由で、自分を逃がすのか。

「悪くないだろう……逃げ出した鳥が、どこまで飛べるか。見ているのもまた面白い」

だが、きっと狩人は、その手に銃を握っている。いつでも撃ち落とし、鳥を捕らえることができるように。

遊びだ。

これは、この鬼畜の下劣な遊びなのだ。

顎を掴んでそちらへ顔を向かされた。

口を、吸われる。

ラグナはふっと、暗い想いに目を閉じた。

こんな現実 早く、終わればいいのに、と。

\*

「……………」

激しい悪寒に我に返ると、ラグナはベッドの上で身を起こして  
いた。

ぐっしょりと額が汗で濡れている。息は、浅くて速かった。

「……ゆめ」

舌足らずにそう言うと、一気に“本当の”現実が帰ってきた。

スイートに連れてこられた部屋の中だ。奴の姿なんて、どこにも  
ない。ついでに、スイートも既に起きていていなかった。

脱力しながら視線を落とすと、見れば何かが自分の腰に巻き付い  
ている。

「紅い、コート……」

ぽつんと眩き、ラグナは沈黙する。

コートを引っ掴み、壁に向かってあらん限りの力を込めて投擲す  
る。

鈍い音を立てて、コートは壁に激突し、床に落ちた。

そのまましばらく、ラグナはコートを睨みつけていた。

汗が、顔を伝ってシャツの上へと落ちた。息は少しだけ深くなっ  
た。

だが、心臓だけは、早鐘を打って 痛い。

「……は、はははは」

空笑いが出た。

夢の中まで出て来るのか、あの鬼畜。

アレは実際に起こったことだ。逃げようと決心する前日の夜に、奴がラグナに言ったこと。

昨日、スイートに冗談混じりに精神に一生傷が残ると言ったが、本当は冗談でもなんでもない。

だって、二日たっているのに、こんなに首が痛くて、怖い。

「……う」

噛み締めた唇は、塩水の味がした。

どうしよう、どうしよう。

どうやって逃げる？

逃げなかつたら、どうなる？

思いながら、ベッドの上で震えてうずくまる。

昨日だってこんな風に怯えていた。場所が変わっただけで、何も変わらない。

奴に怯える日々が、何一つ変わっていない。

落ち着け、ラグナ。

スイートがいつ戻ってくるかも分からないんだ。

一呼吸をして、身体の震えを身体の芯へと閉じ込めた。

代わりに涙を拭って、ラグナは笑みを浮かべる。

「……馬鹿でござえますねえ。独りになるとすぐコレです」

笑えるのなら、何とか大丈夫そうだ。これで今日も強いラグナを演じられる。

ベッドから起き上がると、しばらく自分の格好を見分した。

「……ふむ」

そのまま眠ったせいか、やはり多少は服にしわが残ってしまった

ようだ。

特に問題ない程度だろうと結論付けて、ラグナは部屋の外へと出た。

出たら出たで、そこで大事件が待ち構えていたのだが。

\*

「ふうん、睡眠薬が欲しい、ねえ……」

「そ。どうもこないだから預かっている子の寝付きが良くないんだよね。香物とかじゃなくて、無味の飲ませるやつがいい。臭いはボクの方でどうにかできるから。二十シール。どう？」

「ちやり、と手の中で二枚の銀貨を躍らせると、スイートの目の前で、罫びくまに招かれた男はうーん、と腕をこまねいた。

「最近手に入れるのが難しいんだ。四十シールは貰わないとくす、とスイートは笑う。」

「無理。だってこれしか持ち合わせがないもの」

「はああ……どうせ売らない限り出してくれないんだろ？」

「よく分かっているね、ギブシー」

「……三十。十シールは後払いで構わないから」

「せめて二十五だ。駄目かな？」

「詐欺姫、勘弁してくれよ」

「……君が前に欲しいって言ってた媚薬、見つかったけどうっ、とギブシーが声を詰まらせる。

「嘘だろ……例のあれは秘薬中の秘薬だぞ。なんで手に入ったんだ」  
「偶然いい伝手に巡り合えてね」

スイートはふふ、と得意げに笑って肩を上げた。

「さあ、二十二シールにまけておくれ？」

「つ……ああああーっ、くそ！ 二十三！ もう無理！俺が破産する！」

「ありがとう。じゃ、これね」

ギブシーとの間の机に、スイートは二枚の銀貨と、三枚のそれより小さな銀貨を置いた。

「持ち合わせないんじゃないのか！？」

「ウ・ソ・だ・よ。ふふ、引っかけたね」

「くそ、詐欺だ！」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

さあ帰った帰った、と鮮やかに彼を追い出すと、ドアが閉じる寸前、彼の喚く声が聞こえた。

「ちつくしよう……あんたとの商売に手を出すんじゃないよ！ぱたん、とドアを閉めると、スイートは無音で微笑んだ。

きつちりと施錠してから、ひらひらとドアに向かって手を振った。

「そのうち美味しい話でも持ってくよ……つと、お目覚めかい、ラグナ？」

「……どうも良く寝れやせんでした」

階段の上にはいたラグナはぼそつと呟いてから、首を傾げた。

「睡眠薬って、誰のです？」

聞かれたスイートは一瞬目を大きく開いてから、得心して言った。「分かった。飲まされるんじゃないかって心配してるんだろ。大丈夫だよ、君のじゃなくて……あれ、えーつと、何て言ったかなあ」

確か、テীরリス帝国から密輸されていたのを家の者が見つけて奪い取ってきたのだが。思い返ししながら、スイートは記憶を辿る。

結構遠い国の『モノ』だった。あまり呼び名が知られていないものも多く、そういう手合いに限って隠語もさりげなくて紛らわしいおかげでどういった種類か特定するのに時間がかかったのだが……。「グリム……グリム……思い出した。スラフスキー種のグリムドリバーだ」

口に出した瞬間、ラグナは目を剥いて手すりから身を乗り出した。

「グ……『三級危険指定』ではごぜえませんか！」

「あ、知ってるの？」

「ばか言っちゃいけません。魔連が定めたガイドの『使い魔指定千種』の中でも、『一般人、あるいはその行使に値しないと判断し得る魔術師がこれらの魔獣を扱っている場合は即刻軍部あるいは魔連に報告せよ』とはつきり赤字で書かれています」

魔連というと、魔術師連合のことか。

やたら硬い文章を口に出しているが、おそらく無意識にまるまる暗記するほど、その指定千種とやらではページの到る所でガイド本から警告がされているのだろう。

「……そう、知らないどこかの珍獣だと思ってたら魔獣だったの。

何でまた軍部でさえ手を焼くのを拾ってきたんだろ、あの子たちときたら」

「呑気に言ってる場合ですか！ 扱い間違ったらえらいことですよ！？」

「眠らせとくだけで良いらしいけど」

「普通の睡眠薬なんかじゃなくて特級の魔法ぶちかまさないといけねえんでごぜえますよ！ どこのどいつでござえますか、そんなホラ吹いたアホンダラは！？」

「あー、あの子たちだわ。二十三シールも損したよ」

ぼやくスイートの側を、つかつかつかとラグナが大腿で通り過ぎていく。

「お金の話は後です。連れてって下さい。ふんじばります」

「良いけど……たぶんシグマ・アルスミードに見つかるとよ？」

「人命が懸かっているのにそんなちまっこいこと言ってられますか！」

「鬼畜將軍にとってはそれこそ君よりちまっこいことだろうね」

ラグナの足が地面に縫いつけられたように止まった。

「……前言撤回。スイート、完璧に変装していきます」

「はい、了解」

でもね、とスイートはラグナの襟を捉まえて言った。

「まずは朝ごはんにしよう？」 ラグナ

ラグナが何かを言う前に、彼女の腹の虫が盛大に返事をしたのだ。  
った。

## chase - 06 : 王犬

『三級危険指定』の魔獣グリムドライバーがほぼ野放し状態だと知り、夢見の悪さも吹っ飛んだ。

形振り構わず朝食に飛びつき、スイートの鮮やかな手並みによって変装を終え、髪も魔法で茶色に変えて一つにまとめて準備を終了させる。

ちなみに本日の得物は、スイートの部屋の隅で見つけた片口スパナである。なぜ工具が置いてあるのかをラグナは一瞬考えたが、何かの手入れをするのに使っているとしか思えなかったので、疑問は放棄した。

しかし、スイートは不満だったようだ。

「工具が魔術師の杖ってどうなの!？」

「使いりゃいいんです使いりゃ! 急ぎますよ!」

裏の車に二人で乗り込むと、スイートが問題の魔獣がいるという場所まで車を走らせた。

「特級の魔法ってどんなものだい?」

「場合にもよります。“永久エンドレスの眠り”、“昏睡カマ”が一般的でござえますね」

ハンドルを捌きながら、スイートは僅かに目を見開いた。

「ずいぶんきつい威力のヤツだね」

「獣の眠りは総じて浅いでござえますから。ちよつとやさつとじゃ起きないぐらいにしないと、世話する人間が一番危険なんでござえますよ」

だから、扱いを間違えたなら、魔獣に噛み殺されても文句は言え



ないのだ。

そうこう言っている間に、車はグリムドライバーの入った檻があるという倉庫街へと進入していた。

「考えたくはないですが、既に暴れ出して手が付けられなかった場合は……？」

ラグナの言葉は、途中から消えた。

隣のスイートは表情を失くしている。

「その場合は……どうだった？」

ラグナは一瞬スイートから『ソレ』に目を向け、またすぐに彼女に戻した。

「話では倉庫にいたはずでござえますよね？」

「そのはずだけど」

「何ですかあれは」

「さあ」

グルルルルルルル　と、猛獣の唸り声が前方から聞こえた。

車は、倉庫街の中にぽつかりと空いた場所に止まっていた。

スイートが言っていた倉庫は、『ソレ』の背後で炎上中。消火活動に当たろうとするものなら真っ先に餌食になるため、誰もが遠巻きに怯えて『ソレ』を眺めている。

そこに飛び込んできたのがラグナたちの乗った車だったということだ。

悲鳴と怒号が飛び交う中、ラグナは車のドアを押し開けた。

そろりと降りて、緩慢な動作で『ソレ』　魔獣を見上げる。

犬に似た漆黒の容姿。記憶にあるグリムドライバーの外見通りだ。

だが、これは。

呆然としてソレを見上げながら、ラグナは頭の中でゆっくりと、聞き及んでいた魔獣の特徴を上げていく。

一つ。グリムドリバーの目は真紅である。  
……金色だ。

一つ。グリムドリバーは炎は吐かない。  
……魔獣の顎から、火の粉がちろりと漏れた。

一つ。グリムドリバーの牙、爪は白銀である。  
……白銀というより、鈍い金色だろうか。

一つ。グリムドリバーの大きさは三マート前後である。  
……優に六マートを下らないのでは？

結論。

話が違う。

「……スイート」

魔獣を刺激しないように、ラグナは囁いた。

「スイート。あれはグリムドリバーじゃありません」

「……うん。ボクも何となくそんな気がしていたよ。聞いた話と何か違うなあって思ったもの」

「思っても思わなくても魔連に報告すべきでした。あれ、グリムドリバーの上位種で、『特一級危険指定』でござえます」

「……種名は？」

「アイクハウンド  
「王犬」」

ぴくん、と王犬の耳が動く。

機微を察して、スイートとラグナはその場から飛び退いた。

一拍後、王犬の太い前足が車を押し潰していた。

「わ！」

「っ」

衝撃に軽く二メートルの距離を吹き飛ばされ、二人で背中から地面に転がった。

いち早く体勢を立て直したスイートが、はっと息を呑む。

「まずい、車の燃料に引火する。ラグナ、でんぐり返りに失敗して  
る場合じゃないよ！」

「たまたまこんな風に転がったんでござえますよ!？」

後転の要領でラグナが起き上がった時、既に王犬が火を吹いたところだった。

火柱が空気を喰らって、轟、と立ち上る。まともに火を浴びたはずの王犬は、ぬるま湯程度の暖かさにしか感じないのか、少し目を細めた程度だった。

「くっ……ん！」

「! ラグナ、無茶だよ!？」

腰に差していたスパナを引き抜き、ラグナはスイートの言葉に耳を貸さずに、走る。

王犬が爪を振りかざした。

反応不可能の速度で一撃が迫る中、

「縛れっ」!

一言叫び、ラグナは目一杯にスパナを振り回した。

スパナの硬くて重い頭が、唸りを上げて王犬の足に激突する。

王犬が鋭い悲鳴を上げ、もんどりうって地面に倒れる。

スパナが打ち据えられた王犬の足が、地面にしつかりと縫い止められていた。毛むくじやらの足に絡みつく魔法の紋様に、おお、と周囲から感嘆の声が漏れる。

しかし、王犬の隣に立っていたラグナは、

「……………死ぬかと思いました」

「あのね……死ぬと思うんなら無謀な真似しないで欲しいよ」  
どこか脱力した顔でスイートが近づいてきたが、ラグナは手を出してそれを止める。

「まだ終わってませんよ。一時しのぎですから　っ、スイート！」  
鋭く声を飛ばしたラグナに、スイートはきよとんと呆ける。

「え？」

スパナが魔法の軌跡を描く。

どんつ、と。

「ラグナ!？」

ラグナの生み出した衝撃波に吹き飛ばされ、スイートは目を瞠った。

身をよじるように、王犬を振り返る。

顎の隙間から、火の粉など目ではない、紅い炎が生まれる。

(これは　)

「ラグナ！」

(　　) ピンチでござえますかね)

じわりと汗が額を伝う。

次の瞬間、ラグナの全身を炎が巻いた。

\*

「倉庫街に王犬？ 何の冗談だそりゃ、笑えねえな」

「ジェス・カリスは王犬出現の報告を聞き、眉根を寄せた。  
「准将！」

「分かつてるよ、笑いごとじゃないんだろ。それこそ冗談だ、気にすんな」

手を振って部下の真面目な顔に比べると、ジェスは沈み込んでいたソファから、戦友が執務をしている机の方を見やった。

「シグマ、聞いたか？」

「……ああ。対策課の四班が使えるだろう」

シグマの返事に、ジェスは溜息を吐く。

分かつてない、こいつ。

「いや、だから王犬だと。対策課の連中じゃ、危険度が高すぎて話にならんよ」

「知っているが」

「は？」

シグマは読んでいた報告書から目を上げた。

「四班は実績も高い。王犬を相手にできるのは良い経験だろう」

「……おまえホントにスパルタだな！？」

「今に始まった事ではない」

呆れて肩を落とした時、准将、と部下が声を上げた。見れば、耳に引っかけてある魔力式無線機に彼は集中している。

「報告に続きがあるようで……、……何だと？ スパナ持った魔術師が王犬の炎に巻かれた？ 一体何を言ってる」

はっとジェスが息を呑んだ時、紅い色が目の端で翻った。

「行くぞ准将」

「早っ！？」

窓を開いてこちらを見たシグマは、軍用コートに身を包み、得物に剣を一本引っ提げて、出かける準備は万端だった。

「さっきまで読んでた報告書どうしたんだよ！？」

机を見れば、数枚はあつたはずの報告書の全てに読了済みの判が

捺してある。

『職務怠慢』の一言はどこに消えた。

「スパナを杖に使うような技量は、アレしか持ち合わせていない」  
ふつと薄く冷笑するシグマを余所に、ジェスは「ん、」と気づく。  
「ラグナがいる、ってことは……」

|| スイツテイシヤ  
詐欺姫も一緒。

「おし行こう」

「准将!？」

ばつと濃紺のコートを羽織ったジェスに、シグマの時は無反応だった部下も驚きの声を上げた。

ジェスは彼に振り返ると、にこりと笑う。

しゅたつと手を上げて、

「じゃ、留守頼むわ」

無情に一言。

シグマが窓から飛び降りる。

「じ……准将おおおおおっ!」

部下の悲鳴を気にもかけず、ジェスもシグマに倣い、鼻歌混じりにのっそり窓の枠を飛び越えた。

「ここは四階です

っ!？」

## chase - 07 : 趣味が悪い

炎が燃え盛る。

後ろで一つに纏まっていたはずの髪が、紐が焼き切れたのか、ぱらりと宙へ舞う。魔法が炎で解除されて、茶色に染まっていたのが、いつものエメラルドの輝きに戻ってしまった。

王犬の生み出す火は本来、一瞬で人間を炭化させてもおかしくない威力を持つ。

だというのに。

ラグナは啞然としながら、目の前の王犬を見つめていた。何やら金の瞳が潤んでいるが。

「……何ですか、その目は」

きゆるん、と王犬が鳴く。それを合図にしたかのように、ラグナを包んでいた炎は消え失せた。

彼らの炎は選択性を持つのだろう。髪留めや服はどこどころ焼き切れていたが、ラグナの肌は火傷一つ負っていない。

拍子抜けのあまり、ラグナはへたんつと腰を抜かして座り込んでしまった。

王犬はそんなラグナを静かに見下ろしていたが、突然その横つ面にナイフが数本突き刺さり、盛大に悲鳴を上げて飛び退いた。

驚く間もなく、がっつと焦げだらけの襟を掴まれて後退させられる。気付くと、蒼白な顔のスイートが、ラグナの両肩を掴んで揺さぶ

っていた。

「ラグナ、大丈夫!？」

「……ええ、大丈夫でござえます。何て言うか……そう、えらいことになりましたが」

掠れた声でそう返し、続いて、「よもやこんなことになるうとは思いませんでした」とラグナは呟いた。

激しくスイートに向かって唸りを上げる王犬に、ラグナは一瞥する。すると、王犬は静かにその場に座り込み、尻尾を揺らして大人しく『待ち』の姿勢に入った。

「“選定”でござえますよ。……炎に巻かれても燃やさなかったのは、たぶん、そういうことだと思います」

「……選定?」

「もともと、グリムドライバーが既に暴れ出して、どうにも手を付けられなくなっていた場合の手段は想定していたのでござえますよ。まさか王犬に使うとは思わず、負けが確定の大博打ではござえましたが……」

そう前置きをして、ラグナは語った。

選定とは、魔術師が魔獣を降す際に彼らから貰う、一種の『お墨付き』なのだ。

とはいえ、いきなり選定されるのは稀だ。

何か原因があるだろう、と眉を潜めたスイートに対し、ラグナは少し考えてから口を開いた。

「このスパナ、私は魔法の模様を描く杖代わりとして使いましたが、本来ならただの工具、普通の金属のカタマリです」

「ごんごん、と握り締めていたスパナを地面に軽く打ちつける。

「こんなのを杖に使うと、大抵、魔法の威力は十分に発揮できません。私だって通常時ならちゃんと作った杖を使います」

「……あの魔術師を師匠にして学んだ君だから、できる芸当だって



ことだね？」

はい、とラグナは頷いた。

「どうも、それが王犬の“ツボ”だったようです」

魔獣は使い魔になる時、魔術師の技量を見定める。

ただのスパナ一本で、鮮やかに自分の足に固定化の魔法をかけてみせた技量。どうもそれが、王犬の眼鏡にかなったようだった。

逆に、もし使っていたのが魔法の行使に特化した杖だったなら、

王犬の炎はラグナを炭へと変えていたかもしれない。

しかし、話を聞き終えたスイートはがっくりと肩を落とした。

「言うに事欠いて『ツボ』ってないでしょ……」

「仕方がねえでござえます。魔獣にだって個性があります。好みだつて千差万別なんでござえますから」

言いつつ、ラグナはスパナの先でくると輪を描いた。そこに小さな金の円が出来上がり、ラグナが円を王犬に飛ばすと、毛皮に引っかかったままのナイフが王犬の顔から抜け落ちた。

「痛かったでござえましよう？ 大丈夫ですか？」

くうん、と王犬は目を細めてラグナにすり寄る。

その時、頭に響く何かがあった。

モウ イツピキ ナカマ。 イイ？

「……はい？」

口元に浮かべた笑みが固まった。

今、この王犬は何と伝えてきたのだ？

ラグナが目を瞬くと、王犬はぺろ、と顔を舐め上げてきた。

アークハウンド イットウ チガウ。 …… シラナイ

？

「……スイート。一頭ではないんでござえますか？」

「……二頭いるよ。もう一頭はどこか知らないけど……」

スイートは燃え上がる倉庫をちらりと見やり、気まずそうに顔をしかめた。

「この様子じゃ、市街に行ってもおかしくないかな」

「それを早く言うておくのでござえますよおおおおおおおおお  
!？」

がつくんがつくんがつくん、とスイートの胸ぐらを掴んで揺さぶり、絶叫する。

イタイ ミミ イタイ ! ナカマ トオク チガウ チ  
カク イル

大声に王犬が耳を伏せ、思念を飛ばしてくる。

キタ デモ ナンカ ヘン ?

「えっ! ? 待つでござえますよ! ?」

だが、現実には待つてくれない。

「今ちょっと立て込んで」

半分気絶したスイートを手からぶら下げ、ラグナは振り返り、

喉が、一瞬にして干上がった。

もう一頭の王犬が、ラグナたちのいる広場の端とは反対の場所から、ゆっくりとこちらへ進んでくる。

目を見開いた。視界の焦点がずれて、光景がぼやけてははっきりする事を繰り返す。

ダメ！ クルナ！

ラグナの恐怖を感じ取り、傍らの王犬がしきりに吠えた。

「ほう。来るなと言うか、犬」

嘘だ、とラグナの唇が動いた。

眼前へと足が踏み出され、見覚えのありすぎる軍靴が砂を鳴らす。夢にまで出てきた紅いコートが、風に翻って不気味な音を立てた。

静かに口の端を吊り上げ、細めた蒼い目は、どこまでも冷徹で無慈悲。

長い銀髪は、風に舞い散る火の粉の中で燦然と輝く。

王犬を従え　シグマ・アルスミードは、ラグナを見下ろした。

狩人<sup>シグマ</sup>は傲然と笑む。

「見つけた……ラグナ」

低い声と共に、鬼畜將軍は舌舐めずりをし、

「追いかけてこはもう終わりか？」

嗤<sup>わら</sup>いながら、そう訊ねた。

ひくつと、ラグナの喉が鳴る。

やがて、乾いた笑みを浮かべ、ラグナは独りごちた。

「……もうちょっと、選り好みしても良いと思つのでござえますがね」

よりによって、こいつなのか。

応えるように、シグマの王犬が天目掛けて咆哮した。

逃げ出した鳥は自由を得るか。

悪徳の男は最後に笑うか。

ラグナの幸せは、まだ遠い。

chase・08：カートリッジとすね毛

知りたいことは山ほどある。

見当がつくこと、つかないことの中で、ラグナには大きな二つの疑問があった。

なぜ遠く離れた軍総司令部に居たはずの彼がフィンドールに来れたのか、とか。

なぜ突然王犬を引き従えてやってきたのか、とか。

だが、後者については、まさかとは思うが……原因を薄っすらと察することができた。

「王犬を……力技で捻じ伏せたのでござえますか」

「ああ、これが」

シグマはふつと目元を緩め、背後に屹立する王犬を横目で見やっ

た。  
「ぎゃんぎゃんと喧しい犬だった。あまりにしつげがなくなっていなくな

てな」  
は、と、吐息を漏らして彼は笑う。

「少し、叱りつけた」

「……………っ」

背筋に戦慄が走った。

「それにしても、随分な格好だ。焼け焦げた服とは、斬新な誘い方だな」

腰を抜かしてしまったことを、ラグナは本気で後悔した。

シグマが膝をついて顔を近づけてきても、立ち上がることもままならない。

王犬は仲間であった片割れと睨み合って動けない。

剥き出しになった肩を、シグマの手が掴む。灼熱の火事場になりながら、男が持つ高い体温がはつきりと感ぜられた。

額と額をほぼ突き合わせるほどに顔が近づいたところで、シグマはラグナの目を見つめる。

蒼の中に、自分の蜂蜜色の瞳が映りこんだ。

「私の色は纏ってはくれないのだな」

ラグナが着ていったコートのことを持ち出して、シグマは目を細める。

「残念だ」

「……真紅とエメラルドが似合うとお思いで？ ケバケバでござえますよ」

辛うじてそう囁くと、彼は笑ったようだった。

「では聞くが。何よりも鮮烈に、何よりも強烈に その色合いをこの目に刻みつけたのは、誰だったか？」

この場では自殺行為だと思いつながら、ラグナは目をきつく閉じた。瞼の裏に一瞬、光景が広がる。

真紅に塗れた自分の手。

ふり乱れたエメラルドの髪にまでべったりと。だが構わない。

自分でしてしまったことの決着は、自分が決めよう。

「捕らえたのは、誰だ」

責めるような問いかけだった。

「おまえだ、ラグナ。全て、おまえが撒いて、そつと知らずに育てた種だ」

シグマは言った。

「おまえが、全て狂わせた」

唇が触れ合う寸前、彼が小さく囁いた。

だが、その意味を問い返す機会は与えられなかった。

下から手が伸びてきて、気付くとラグナは地に押し倒されていた。

「……………勝手にボクのお姫様に触れないでくれる？ そのきれいな面の皮……………引っぺがしてあげようか」

ラグナを背後に庇い、スイートがシグマの喉元にナイフを突きつけていた。

彼の首からさつと朱が走るのを見て、ラグナは息を呑んだ。やり過ぎだと言おうと思ったが、微妙な均衡を下手に声を上げて崩せない。

凶暴な輝きを見下ろし、シグマは酷薄な笑みを浮かべた。

「一国の少将に刃を向けるか。例えミゼットを敵に回してでもその娘を守ると？」

「公私混同しないでくれる？　ボクは最初っから最後までプライベ  
ート。ラグナに呼ばれた日から、『詐欺姫は無期限休業』って部下  
にも言い渡してある」

だから、とスイートは言う。

「ボクが刃を向けてるのは、『個人』だよ、シグマ・アルスミード。  
鬼畜と言われたおまえなんか、ラグナは絶対に渡すものか」

「……良い度胸だ。なるほど、奴が気に入るのも頷ける」

「……奴？」

問い返したスイートは、次の瞬間短く悲鳴を上げていた。

シグマに突き付けていたナイフが突然弾かれたように跳ねて、ス  
イートの手から零れ落ちた。

やや遅れて、タアアン、と乾いた音が響く。

ラグナはぞっとした。

覚えのある音だ。

「……この音。まさか、狙撃でござえますか！」

しかも、かなりの遠距離だった。軽く千メートル　一マイティか  
ら一・五マイティは離れているだろう。

そんな精度でナイフなどという小さい対象に弾を当てる神業を持  
つ人間を、ラグナは一人しか知らない。

「やはりおまえには耳慣れた音だったか」

「!？」

背後から声がして、反応する間もなく、シグマに羽交い絞めにさ  
れていた。

「ラグナ！」

しまったと唇を噛む間もなく、叫ぶ。

「スイート、逃げるのでござえます！　この狙撃精度、『天の眼』  
です！」



「けど！」

真つ二つに折れたナイフの側らに蹲り、スイートが怒鳴る。彼女は飛び散った欠片で負傷していたらしい。怪我をした手を庇いながらも、こちらを睨んでいた。

だが、これでは彼の狙撃手にしてみたら、彼女は全く無防備だ。

戦時中は軍だけでなく、魔術師の間でも噂だった。

『閣下』の支配する戦場には、姿の見えない『死神』が魂を求めて現れると。

一度狙われたならば、どこに隠れても殺される。それゆえ『天の眼』と恐れられた、まさに天才と呼べる狙撃手。

現在は、シグマの一つ下の階級の准将になっていたはずだ。

「あの変態にスイートが傷つけられるには及びませんから！」

「アレを捉まえて変態とは……相当だな、奴も」

優勢に立った余裕からか。シグマが呑気に後ろでぼやいているが、ラグナがどんなに身をよじって逃れようとしても、拘束の手が緩められる事はない。

ここへ来て早くも万事休すか

ラグナは自分の見込みの甘さを呪った。

フィンドールまで短時間で来れるはずがない？

変装していれば情報もそう渡ることはない？

そんな常識は通じない。何が起こったって不思議ではない。

だって、自分の相手は、策士泣かせの鬼畜將軍　シグマ・アル  
スミードなのだから。

\*

「ああ、俺って最低」  
それは心底からの呟きだった。

弾を発射した余韻が、すつと身体に馴染んで消えていく。戦場においてはずつと前に慣れた感覚だ。そして、將軍閣下の援護となれば、それこそ三桁に上る数を経験している。

倉庫街は入り組んでいる。広場に居たとはいえ、あそこを狙える場所となると、一・三マイティほど離れたこの三階建ての建物しかない。

とりあえず、將軍の窮地は救ったので、今回も役割は果たしただろう。

倉庫街の一角にぶら下がる洗濯物から、無意識にずっと風向きを計測していたことに気づき、苦笑う。

ジェスは建物の窓枠に寄りかかり、緩慢な動作で小銃ライフルのボルトハンドルに手をかけて、ゆっくりそれを引いた。まだ熱を持つ薬莢が弾むように排出され、ジェスの手に収まった。

使用済みの転移魔法の札を取り出すと、それに薬莢を包んで、懐にしまう。

詐欺姫に向けたものとして、この先この薬莢を捨てる事はないだろう。

「……詐欺姫の血か。美しいだろうなあ」

そうジェスは呟き、乾いた唇を舐めた。

スコープ越しでは、彼女の庇っている手がよく見えない。

「叶うならもつと近くで見たかったが、どっちかという俺は遠ければ遠いほど有用になる方だもんなあ……」

白い手に美しい紅色が滴り落ちている様を想像し、身の奥がざわつく。

「ああ、まずい」

ジェスは独りごちながら、苦笑とはまた別の笑みを浮かべた。

シグマは鬼畜だ、サディストだ、などと言われ続けているので、ジェスには既に耳慣れているし、傍にいるせいで感覚が麻痺している可能性もあるのだが。

その彼の性癖を許容でき、あまつさえ詐欺姫に一目惚れなぞしてしまった自分は、相当に数寄者すきものなのかもしれない。

しかし、これはいただけない。

「どんなに彼女の血が綺麗だろうが、怪我させちゃだめだろう、俺最低だねえ」

暗く喉の奥を鳴らしつつ、目を細めた。

「けど ごめんよ、姫。傷をつけようが壊してしまおうが……俺は、君を手に入れるまでは、暴走が止まりそうにないんだ」

欲しいものなんて、待っているだけではすぐに誰かに奪われる。戦場では欲しいもの、守りたいものから順番に失われていく。

故にシグマもジェスも、この好機を逃すような悪手を打つ気はないのだ。

スマートに、シンプルに。それがどの場合においても最善。如何に手段が汚かろうと、勝たなければ意味がない。

スコープから眺めていると、シグマが執心している魔術師の少女の横顔が見えた。

（失念していたな、ラグナ・キア。ミゼットの軍の将官には、非常に現地で指揮をとるための急行手段として、転移用の魔法札が支給されてるんだよ）

これも魔連と相当の駆け引きをした拳句にミゼットがもぎ取ったものらしい。が、交渉役の血と汗と涙など知った事かと言わんばかりに、戦場においてはそれこそ將軍たちに紙切れ同然の頻度で消費されている。

焦りを滲ませたラグナの顔をぼんやり眺めつつ、進行していく事態をジェスは見守る。

あとはシグマが適当にラグナと詐欺姫を持ち帰ってくれるだろう。そろそろ撤収するかな、とジェスがぼんやり考えていると、

突如、背後に気配が『出現』した。

「！な」

んだ、と、言葉が続かない。

声を発する前に、頭に衝撃が走る。

そのまま引き倒され、ジェスは床に頬を打ちつけた。

急速に暗転する意識の片隅で、地を這うように低い声が響く。

「ナニをワタシの可愛い子をかどわかそうとしくさってるのよ？  
この性悪將軍共」

その口調と音域に違和感を覚え、ジェスは意志の力だけで瞼をこじ開け、自分に襲いかかった人物を見定めた。

見えたのは 裾足らずのズボンから出た、すね毛だらけの足。

気のせいだろうか。ぶんぶんと香水のような香りもする。

やっとの事で見上げた顔は、ジェスにとってある意味凶器だった。

「お」

「ごすん、とこめかみに降ってきた足の裏に、今度こそジェスの意識は文字通り踏み潰される。

屈辱だ、と思いながら、ジエスは人物を端的に表す言葉を、内心で愕然と呟いた。

（ オカマ？ ）

chase - 08 : カートリッジとすね毛 (後書き)

なんだと……!?

という訳で、謎の人物 (ジェス曰くオカマ) が出現しました。

## chase - 09 : 車はバレエなんて踊らない

どうにか、どうにかしてシグマの腕から逃れなければ。

ラグナは必死に頭を巡らせていた。

王犬たちは未だに睨みあつたまま。スイートは手に怪我をしてい  
るし、自分は拘束されている。

シグマがどういふ行動を取るのか、読めないのが痛い。

舌打ちして、ラグナは認める。

思いつく限りでは最悪の状況だった。

彼の思考回路を読み切るのは至難の業だ。彼の感性は、もともと  
の常人のそれからはかけ離れていることが予想され、おまけに知謀  
策略を巡らせるのは得意中の得意。もしも彼に対等な駆け引きを持  
ちかけられる奴がいるならば、こちらがお目にかかりたいと思う。

魔法は 使えない。軍人の癖にシグマは勘が良いのか、魔法の  
気配に敏感だ。影でこっそり紋様を描こうものなら……ラグナは似  
たような事態に陥った時の事を思い出して身震いしそうになった。

よそう。まともに唇を奪われるのは数回で十分だ。

だがこうなると、本当に出来ることなど限られてくる。

考えている間にも、シグマは腰に提げた剣を鞘ごと外し、スイー  
トの下へと歩いている。引きずられるようにしながらもラグナは踏  
ん張ろうとしたが、いっそ悲しいぐらいの体格差ではそれほど妨げ  
にもなっていない。どこるか目を細めた所を見ると、楽しまれてい  
るようだった。

悔しい。

こんな奴に、どうして捕らわれ続けなければならない。

『おまえが撒いて、そうと知らずに育てた種』 そんなもの、  
自分は知らない。

自分はただ、走っただけだ。

彼と一瞬でもすれ違ったのだらうあの場所で、そこでできた全てのことを、命を懸けてやっただけだ。

「スイートに……手を、出すんじゃねえでござえます……！」  
ラグナは嘸みついた。

「この子はっ……、私とてめえ様とのことに巻き込む人間じゃござ  
えません！」

「残念ながら、それはもうおまえの問題ではない」

無言だったシグマが、頭上で呟いた。

「コレは報酬なのでな。連れて行くと『天の眼』に言われている」  
「……………っ！」

「一目惚れだそうだぞ？」

後ろから耳元で囁かれた。見えないが、えげつない笑みを浮かべているに違いない。

天の眼？ ジェス・カリス准将？

あの変態ボケその二タラシが！？

スイッティシャを……毒牙に！？

「」



雷に打たれるよりも衝撃的だ。

しばし呆けたラグナは、くたりとシグマに身を預けた。

「詐欺姫はもう少し元気なようだが……大人しくなったな。やはりジェスの狙撃では迂闊に動けない、か」

彼はくつと喉を鳴らした。

しかし、シグマはすぐに異変に気付いたようだった。

「……どうした、ラグナ・キア」

声は心なしか柔らかい。

「……………じ、」

「？」

それもそうだろう。魔法が使えない魔術師などただの人間だ。しかも自分の腕の中で脱力しているときている。

そう……

そりゃあ、油断するじゃあないか？

「冗つ談じゃあねえでござえますよ

っ！」

\*

怒髪天。

目の前に迫っていた詐欺姫が、『ひくっ』と小動物か何かのよう  
に蒼褪あさおめて震えた。

引きつった顔は、見てはいけない何かを見たようだ。

そう、その点ではシグマは幸運だったのかもしれない。

しかし、突然絶叫したラグナを啞然と見ていたために、事態の進行についていくのが遅れた。

バリツ　と。

空気が裂ける、不吉な音がした。

「嫌いです嫌いです嫌いです嫌いです嫌いですっ！　てめえ様なんか人間のゴミカスクズどころか豚の餌にも糞にも分不相応です！」

ラグナの変化に、シグマは目を瞪る。

熱が　。

腕や体を感じる熱が、人肌どころか、焼した鉄を押し付けられるようなものへと変わっている。

しかも、ラグナの体が蒼白色を帯びた光でうっすらと発光していた。

「育ててしまった種なんか知りません！　狂わせてしまった運命なんか知りません！　ただうんと体を伸ばしたいだけで！　てめえ様の手の中で飼い殺しなんてまっぴらごめんでござえます！　おまけに幼馴染が変態の毒牙にかかるなんて　」

シグマは息を呑み、ラグナから離れて飛び退った。

「最悪を通り越してっ、もはや悪夢でござえ

ます！」

完全に我を忘れた顔だった。

ラグナの足元から、ぶわりと蒼白く、ゆっくりと蛇がのた打つように、極太の光の筋が波打ちながら現れた。

傍で睨み合っていた二頭の王犬の内、ラグナが降くだした王犬もまた薄く発光している。

「 共鳴現象か！」

シグマは驚きに小さく言葉を漏らした。

「道端の砂粒にでもなつて……、猫に後ろ足で蹴られて下さい！」

光の筋を手に収束させるラグナに、後ろで詐欺姫が切羽詰った表情で叫んだ。

「待つ、て　ラグナ！　駄目、それは……！」

避けても切つても受けても無駄だ　血の気の失せた彼女の表情からそう読み取った。

通常規模の被害で収まる程度ではないものが発動しようとしている。直感的にシグマは悟り、そして、手の打ち方を誤ったことを知った。

これは盲点だった。

ラグナにとって、詐欺姫は　地雷。あるいは大爆弾の導火線だったのだ。

しかし、

「またも事態をひっくり返す闖入者が現れたのは、まさにラグナが手を振り下ろそうとした、その時だった。」

「はあいラグナちゃん、そ・こ・ま・で・よ えいつ」

太い声がした。

そしてシグマは、なぜかこの時。

ひゅんつと蒼白く魔力を帯びていた大気を切って、一個の弾頭が自分とラグナの間を通り抜けて行ったのを、はつきりと目撃することができた。

それからの記憶は、ない。

\*

スイートことスイツティシャ・イヤル・ペンは、呆然としていた。

対峙する二人にぼんと撃ち込まれた銃弾は、彼らの間を素通りし

て、王犬に最初に踏みつぶされていた車へと突っ込んだ。

小さな弾は呆れるほど子気味良い音を立てて車の機構を衝撃で断ち切ると、燃料漏れを起こしていたところに火花を散らした。

次の瞬間に起こったことは、言うまでもない。

車が絶叫して跳ねた。

まるで最初からばねが下に仕込んであったのだとしても言いそうなほど、空高くへと車体がくるくると跳ねて舞う。冗談にしか思えない光景だが、その下ではやはり同じように起こった衝撃波でシグマとラグナがまとめて吹き飛ばされているのが見えた。

あれでは二人とも意識を失ってダウンだろう。

突然の轟音に驚いた王犬らも、ぎゃんぎゃんぎゃん！ とパニックに陥って同じ場所をぐるぐる互いの尻尾を追いかけて回っていた。

って、

こんな豪快な仲裁がどこにある！？

ぽかんと見ているしかできなかったスイートは、慌てて振り向いた。

「やつほースイート。無事ねん？」

ふいーっ、と拳銃の銃口を冷ましながら、呑気に手を振っている『性別不明』の人間がいた。

かつつん、と、ぴかぴかに磨かれた靴をその人物は鳴らす。すら

つと伸びた長すぎる足は、漆黒のスーツのズボン丈が少し足りない上、靴下が短いために白いすねが見えているというやや残念な状態。襟にたつぷりと銀狐の毛がついたホワイトスモークのコートを羽織り、緩く巻いた長い蒼海色の髪が、物憂げな美貌の顔をふんわり飾っている。

そして、整ってはいるが　顔立ちは紛れもなく男だった。

「……お父様？」

「うんうん、返事はできるみたいね。なら良かったわ」

にっこりと、彼　いや、彼女なのか　デイト・フルロ・ペ  
ンネは、満面に笑みを浮かべた。

かと思うと、一転して鬼と紛うような形相に変化した。

「あのクソ狙撃手。ウチの娘をよくもキズモノにしてくれたわね  
許さないわよ」

「あ、あの。えっと、『天の眼』は一体どうしたんですか？」

「ちゃあんとちょいキツのぐるぐる巻きにして　鎖でね　ちょ  
うどこっちの支部に来てた妹の中佐ちゃんに引き渡したわよ。そっ  
から超急いでこっちにきたの。ラグナちゃんピンチだったし、スイ  
ートは怪我してるし……んもう、ホンツト腹が立つたらないわあ」

デイトは言いながら、さっと鎖　ではなく、小型の鉄の香炉  
を取り出して、意識を失い倒れているシグマの鼻先に置いた。

「眠り香。軽〜く一時間は目を覚まさないでしょ。この人には自分  
で帰ってもらおうわ」

そして、やや離れた場所で同じように倒れたラグナを仰向きにし  
て、呼吸を確かめてから楽な姿勢へと寝かせた。

「さてつと、気絶しちゃったラグナちゃんを家まで運ばないといけ  
ないわね。スイートもごめんねえ、隠れ家に置いてあったあの車、  
半壊してたから徹底的に利用しちゃった」

ふう、と秀麗な眉を潜めて溜息を吐き出すと、彼は軽く指を鳴らした。

未だに騒いでいた王犬二頭の周りに、どこからともなく魔術師たちが現れて、素早く連携し合って“永遠の眠り”エンドレスの魔法をかけ始める。

「もう一つ謝らなきゃ駄目ね。ファミリーの子が王犬をグリムドリバーと思い込んで持ち帰ってきたのは知っていたんだけど、魔連に連絡して魔術師を手配してもらうのに手間取ったのよ。そしたらもう大暴れが始まっちゃって……正直、ラグナちゃんとスイートがここにいて聞いてマジ噴きたわよ、ワタシ。」

さらには軍のバッドボーイがわざわざ中央から二人揃って、婦女子を拉致しにきてるじゃない？ 『天の眼』があなたを撃つたから、ワタシ、頭の血管がブチ切れてね……とまあ、そういう訳よ」

ぱっぱと鮮やかな手際で事後処理を指示していき、焼けた倉庫のその後の用途、怪我人への手当または医療費の賠償と諸々を終わらせると、ディートはさっとラグナを横抱きにして、スイートを迎える車の運転席へと追い込んだ。ここまで車を運んできた運転手はディートの秘書の一人で、これから事後処理の引き継ぎを行うという。

「にしても、王犬のことを報告したら、魔連から面倒な依頼が来たのよね」

「……依頼？」

「そ」

スイートがバックミラーから見ると、右後方の座席ではディートが悠然と足を組んでいる。もう片方の席は倒されて、そこにラグナを寝かせていた。

「テューリス帝国を通って、スラフスキー州の向こう……リディンスの山。そこで見つかった王犬の双子が、半年前に消えたって話があったのよ」

「……まさか、届けると？」

「そのまさかよ。ラグナちゃんがこのミゼット王国に居るのは分  
り切っていたから、この子への正式な命令状までご丁寧えいに渡してき  
たわ。交換条件はあの人の復籍 どうよ？ この抉えくりっぷり」  
「……………それが本当なら、許してはおけません」  
スイートはぐっとハンドルを握る手に力を込めた。

「だって、ラグナはそのせいで、“あんな目”に合ったんです  
から」

そして、車内には沈黙が落ちた。



chase・09：車はバレエなんて踊らない（後書き）

後半ちょっとシリアスでした。

## chase - 10 : ラッピングは天使の羽根

「……え？ ちょっと待って。今、何て言ったの、ラグナ」

目を剥いたスイートを余所に、ラグナは無心に目の前のこんがりとしたウインナーにかぶりついた。

たった二口で指一本程のそれをまとめて二本食べきると、フォー  
クをスイートにすつと向ける。

「ふあはは、ふへふつへふいつふあんへほへえへふほ」

「……」だから、受けるって言ったんでござえますよ『って……本  
当に魔連の命令受けちゃうのかい!？」

スイートの翻訳に、ラグナは黙って頷き、次いでサラダへと手を  
伸ばした。

「王犬をリデインスへ送り届けるだけなら、帝国を通ろうが何だろ  
うが、別に大丈夫でござえますよ？ 魔術師には国境なんてあまり  
関係ねえでござえますからね」

「……いや、そうじゃなくて。あのね、レディ。目を覚ます数時間  
前のことを君はちゃんと覚えているかい？」

ん、とラグナはフォークを銜くわえたまま止まった。

「……何でござえました？」

スイートは、肩を落とさなかった。

代わりに、ゆつくりと眉間を揉みこみ、彼女は溜息を吐く。

「やっぱり、ああなると覚えてない、か。……君ね、王犬と共鳴現  
象を引き起こして、もう少しで倉庫街一帯を吹っ飛ばすところだっ  
たんだよ？」

………吹っ飛ばす？

身に覚えのない言葉に、寝起きでゆっくりとながらも回っていたラグナの頭は空転する。

「じゃあ、あれだ。シグマ・アルスミードに羽交い絞めにされた所までは覚えているんだね？」

今度は確かに覚えていたので、ラグナは頷いた。

「ラグナ。君が依頼を受けるなら、彼『も』リディンスに向かわなければならぬんだよ。その辺り、分かっている？」

「？」

言われて、ラグナはゆっくりと瞼を瞬いた。

起きてからスイートに聞いた話だと、二頭は魔術師らによってしかるべき措置を施され、現在はペンネ家で預かっている。

だが、シグマに殴られ、凹ぼこられ、啼き啼き彼の下に降くだった方の王犬は、本来の主と引き離された状態のはず。

王犬を二頭ともリディンスへ連れて行って、そこで選定を解除して終わりとはいかない。

魔法を学んだことなどシグマにはないだろう。何せ軍人であるのだから。

つまり、彼に仮に選定を解除してもらおうとするなら。

「う、嘘でござえましよう？」

へなつとラグナはテーブルの上に崩れた。

「私が立ち会っただけでござえますか！？」

「だって、それしかないでしょ。同族に選定を受けている君ぐらいだよ、王犬を二頭解放しても無事に生きて帰ってこれそうなのって」「……うう。これは盲点でござえました」

そのまま突っ伏すと、幼馴染はふむ、と肘を抱いて考え込んだ。  
「ややあつて、二本の指を立てる。」

「……そんな君に良いけど悪いニユースがある。どっちから聞きたい？ ちょっと良い方よりと悪い方より」

「……悪い方よりで」

良い方は後にとつておいた方が、少しばかり傷が浅く済みそうだった。

ラグナの言葉にスイートは軽く頷き、口を開いた。

「一時間ぐらい前かな。ティーリス帝国とミゼットがトラックで軍事衝突を起こしたそうだよ。今の所、トラックに住んでいる魔術師が君の師匠を含めて三人、市民の安全確保に尽力しているらしい」

「……………っ!？」

椅子が転がった。

愕然とテーブルに手をついたラグナを見て、スイートは「落ち着いて」と呟いた。

「君、鬼畜將軍に会ったせいかわからないけど、ちょっとどうかしてるよ。あの人はラグナの師匠でしょ？ たとえ魔連から除名処分を受けていたとしても、彼は魔術師だ」

「……………あ」

「どれだけ馬鹿力を振り回せるかは、君の知っでの通りじゃない」

一本残った指を、スイートは振る。

「で、もう一つのニユース。アルスミード少将は、軍部に帰るんじゃない、そのまま前線に向かったみたいだ。……ついでに、ボクを撃ったジェス・カリス准将も。彼らの実力は、ボクらにとっては厄介でこそあれ、この国の人間全員が信頼している。だから、数週間もしない内にこれは平定されると見ていい……………けど、」

ぶぶ、つとそこでスイートが口を覆ったので、ラグナは首を傾げた。

「何でござえますか？」

「ううん、何でもない。ただね、准将は……妹の中佐に絞られて、そのあと荷物の中に入れられたんだって。これを聞いたら、怪我させられたことなんてどうでも良くなっちゃったよ」

溜飲が下がったらしいスイートを眺めてから、言うに困って、ラグナは結局無難に言葉を選んでいた。

「……………相変わらず、傍から見ても見事な運ばれっぷりでござえますね」

実の妹から荷物扱い。

軍にいた時のことを思い返すと、彼女のジエスへの愛は重いのだが、その方向は少々変わっていたはず、と、リザ・カリス中佐に就いての記憶が掘り起こされた。

スイートから聞く限りでは、どうせまた肢体を綺麗に飾られて、ガラスケースに入れられ 相当美しくラッピングされているのだろう。おそらくは。

前に見た時は純白の羽根で裸体の上半身を神々しくかつ煌びやかにデコレートされていたと思う。

ジエスに『恥ずかしいと思わねえのでござえますか』と聞いたのだが、その時の答えがまた哀愁漂うものだった。

『なんか……もう、こうなつて数分経つと悟りに達するようになるんだよ。むしろ俺を見てつて感じ？』

『……………変態でござえますね？』

『違つー！』

以上、閑話休題。

しかし、スイートを狙っていると知った以上、同情する気はラグナには皆無だ。

「それで、その二人の扱いについて、軍部でちょっと気になる動きが見られたんだよね」

「動き、でござえますか」

うん、と頷いたスイートの顔は、思案を重ねているように思えた。「父さんが張りこませていた兄さんたちの話だよ。どうも軍部……、というよりは国の方からかな。今回の軍事衝突の背景に、ティールスとミゼットの間で裏取引があったかもしれないって」

それは、とラグナは目を見開いた。

「内容までは分からなかったそうだけど。……ティールス帝国では、西方で内乱があつたって噂も流れてきてる。もしそうなら、国力を内乱平定に傾けている今、ミゼットとぶつかるのは本来避けるべき事態のはずだからね。兄さんたちは妙だと思つたみたいだ」

「……では、あの鬼畜が、ひよつとすると乱の平定に動かされるかもしれない、と？」

「命令と、戦局次第では」

スイートは頷く。その目はぼんやりと遠くを眺めていた。

「そして、ミゼットはティールスから何らかの利権を受け取る……彼らにとつては断腸の思いだったはずだ。一部に喰いつかれれば、そこから一気に破られる可能性だってある。大博打を打つたね」  
事態の途方も無い大きさに、ラグナは小さく顎を落とした。

しかし、スイートの話の展開はさらにその上に行く。

「けれどティールスも黙つてはいない。……どうやら、ミゼットの牙を多少強引にでも引き抜く方法を探していたらしくてね。二週間ぐらい前に、将軍が異常な執着を見せる愛人の情報をどこからかも

ぎ取った」

ぞくつと背筋を駆け抜けるものがあつた。

顔を強張らせたラグナに、同じように硬い面持ちでスイートは言った。

「という訳で、君はティリスに狙われているし、少将引き抜きを阻止するミゼットも必死だ。リデインスに行くなら、戦火を潜つていくかもしれない上に、更に追手がかかる危険が出てきた。ここまで来ると、出汁にされる君もいい迷惑だよね」

スイートの薄い唇が、太い笑みを描く。

「……スイート」

「なあに？」

「……降りても、良いんでござえますよ？」

「、」

スイートはしばらく無言でラグナを見つめた。やがて彼女の口は薄く、呆けたように開く。

音もなく近づいてくると、おもむろに彼女の腕が伸びて、

「おバカ」

「あだあつ!？」

額に厳しい爪弾きを喰らった。

スイートの爪は長くて手入れされている。それだけに、無駄に効くのである、これが。

悶絶し、ぶるぶるしていたラグナの頭上に、更に呆れた声がかかる。

「一家の大恩だよ。軽く言い出したことじゃない……そのことぐらい、君も考えたら分かるでしょ？」

「……!」

スイートの言葉に、ラグナは涙目で頷くしかない。同時に、ぼろ

つと、大粒のものがいくつも目から零れ落ちた。

それが見えなかったはずもなく、俯いたラグナの頭上で、スイートが苦笑いをする気配がした。

「相当に追い詰められてたんだねえ……本当、許せないね。君をこんな状況に追い込んで、あの將軍は何がしたいんだか」

つととスイートの指がラグナの顎をなぞり、顔を上げさせた。優しいサファイアの瞳で見つめながら、ラグナの<sup>まなこじり</sup>眦に浮かんだ涙をもう片手の指で拭い去る。

「泣かないで、“La mia principessa”。どんな迷路で迷ったとしても出口はあるよ。思いもしなかった抜け穴だって、見つかるかもしれないんだから」

「まあ、」

しかし、スイートは最後が容赦がない。

「助けようとしているボクの目の前で、横から別の誰にかっさらわれるのが毎度毎度のことだけだね？」

少将もその亜種で数か月行方不明だったでしょ？

……事実である。だが、ここで持ち出されるのはどういう意味なのだろう。

「……別に狙ってはいいねえのでござえますよ？」

「うふふふふ。だろうね」

つまり、言いたいののはこういうことか、とラグナは明後日へと旅立ちながら思う。



『今度間違つてホイホイ知らない誰かについて行つたら。 さす  
がにボクでもお仕置き決定だよ?』

本音を敢えて言わないことが、これほど効果を発揮するとい  
う話術もそうそうないだろう。

真に怖いのは、目に見えて感じられる鬼畜な行為ではなく、知覚  
外の何かであるのかもしれない。

気分は蛇に睨まれた何とやら。ラグナはスイートの浮かべる完璧  
な笑みに少しだけ固まった。

chase - 11 : ナイスショッキングー!

「はあーい、ちびちゃんたち、おとなあしくしてるのよー?」

につこりと顔に貼り付けた笑みに、びくつと二つの黒い毛玉が震えた。

サイズが縮んだ王犬二頭は互いにぴったり身を寄せ合って、シャワーのノズルを握ったディートからにじにじと後ずさる。タイルの上を湯が走るのを見て、一層怯えた様子で、きゃん、と哀れな鳴き声を上げた。

じりっ。

にじっ。

じりっ。

にじっ。

じりじりじりっ。

にじ……。

「ふ、壁に追い詰めたわ。さあ逃げ場はないわよ。さっさとシャワーの餌食になりなさい! ほほほほぶっ!」

覆いかぶさるように飛びかかるが、ぱっと散った二頭の前に、しこたまタイルに頭を打ち付け、ぐったりと腰から脱力した。

良い音が響いたものだ。

めげずにむっくり起き上がると、さらにびくつく王犬らに構わず、あいたたた、と額を擦った。

「もー、どーしてこんなに水嫌いなのかしら。リディンスの山にだって冬なら雪はどっさりあるでしょうに……」

あれか。

大男なのがいけないのか。

それともターバンよろしくタオルでまとめ上げた髪がお化けなのか？

「……ノーパン半ケツズボンだからではないのでごせえますか？」

「あらラグナちゃん。あなたもワタシに洗われに来たワケ？」

浴場の入り口でドア枠にもたれるように立っていたラグナは、ディートの顔を改めて見ると、「額が割れてますよ……」と引きつった顔で呟いた。

額を触っていた手を見ると、水気に混じって確かに赤いものが滲んでいる。

「あらホント。やだわ、こんな割れたコブ作ったらお化粧したって台無しじゃないの」

「むしろタイルで頭打ってびんびんしてるディートが怖いんでごせえますが。あと洗われるのは結構でござえますよ」

「ふうん、つれないのねえ……これでも結構、鑑賞に堪えるカラダ作りはしてるのよー？ 伊達にペンネ家のアタマやってないわ。て

いつかラグナちゃん、この程度で気絶してちゃ、とつくの昔に拉致監禁拷問暗殺、一通り何でもやられちゃってるわよお」

へらへら手を振って笑うと、少女は透き通った緑の髪を揺らして、くすつと肩を震わせた。

「久しぶりに会いましたが、デートはデート。やっぱりスイートの親でござえますね」

「うふふふ。ありがとう。人格と身体のみスチョイスで有名な一家だから、そこは誇ってるのよ」という訳で。

「……申し訳ないんだけど、お手伝いしてくれないかしらん？」

「ええ、多分そうだろうと思いました」

二兎を追う者は一兎も得ず。

しかし、追う方の頭数が増えれば別である。

結局、石鱗片手に二人で王犬を追いかけ回し、数分後には黒い毛玉たちは丸洗いの刑に処される事になった。

\*

「ふうん。じゃあラグナちゃんは結局、リデインスに行くことにしたのね？」

「あい。あの鬼畜はトラクの軍事衝突に数日はかかり切りでしょうから、その間にミゼットから出てティーリスを通り抜ける予定でござえます」

しゃくしゃくしゃく、と指先が王犬の毛を揉む度に、黒い身体が白い石鱗の泡に塗れていく。

王犬をまとめて洗っているラグナの横で、デートは鏡を覗き込み、割れた額に消毒液を塗っていた。

後は厨房から持ってきた氷袋を腫れた部位に当てておけば問題ない。あまり怪我しないで下さいよー、と、苦笑するファミリーの声  
が耳に痛かったが。

「行方不明だったラグナちゃんが見つかったって嬉しそうにして出て行ったから、特に心配しなかったのにねえ……スイートもまさか、あなたがあんな厄介な相手に目をつけられたなんて、思いもしなかったでしょーね」

ちら、と横目で見やれば、乾いた笑いが少女から上がる。

「で？ あの冷血漢にひどいことはされてないの？」

「ひどいことと言いますか……そうでごせえますねえ」

言いながら、ラグナは「何がひどいことなのやら、あんまり判別つきやせん」と笑ってみせる。

「……………」

デートには、その笑顔がひどく痛々しいものに思われた。

幼い頃から知っている少女は、良く笑う。

しかし、その裏には必ず数え切れないほどの涙が潜んでいることを、親友であるスイートや、彼女の成長を見守った大人は誰もが知っている。

そんなラグナは、今回も無意識に悲鳴を上げていることを自覚していなかった。

『あの男』の手中に収められて、その上更に自分にされたこととのひどさの判別がついていない。

裏を返せば、それだけ多くのことを強いられたのだと暴露しているようなものなのに。

「……ふてえ野郎だ。今すぐに行ってそのタマとつてやるおか」

「はい？」

「いえ、何でもないわよ」

問い返した少女に、にっこりと笑みを刻み、ディートは頭を振った。

いかん。地が出た。

「それにしても……うちの人はどこをほっつき歩いてるのかしらね……」

浴場の天窓を見上げて、現在家に不在の妻を想う。

ラグナ同様、気付くといつの間にかいない人物の筆頭であり、放っておくと予想外の無謀な行動に出してしまう、じゃじゃ馬を体で表したような人である。

「まあどうせ、今日もどつかで機関銃マシンガンぶっ放してるのよね。あーあ、スマートじゃない。汚いじゃないの」

もっと、こつ、弾丸一発で状況を一変させるようなスタイルが良いと思うのだが。

その点ラグナを鬼畜將軍から引き離れた時のアレは気持ち良かった、と更に思考が派生し。

「……ディート。ディート？」

「なあに？」

「手元のソレは一体……」

聞かれて、ディートは手元に目を落とす。

消毒液を染み込ませた綿棒を持っていたはずの手には、黒光りする拳銃が握られ。

もう片方の手には、分解用の自家製万能工具が握られていた。

……どうも妻のことを考えると、気付けば手持ちの銃を弄ってしまつらしい。浴場では湯に浸かったりすると僅かな温度の変化でパーツが歪むかもしれないのだが、それすら忘れていたようだ。

どっから取り出した、と言わんばかりの目で見つめられ、ディー  
トはじつと拳銃を目の前に掲げる。

「……んー、」

拳銃の中の弾数を軽く数えてから、安全装置を外す。

「どー説明しようかしらねー……」

ぼやきながら、

素早く立ち上がる。

身体を捻るように振り向き、

天窓へ銃身を向け、

撃った。

バラバラとガラスの破片がタイルの上に落ちる。

騒々しい音に混ざって、慌てたように屋根の上を走る音がした。

「逃がすかネズミ」

舌打ちしてから、立ち上がって声を張り上げる。

「ファミリー！ 追っちゃって！」

ディートの声に、あちこちから応と家族たちの声が上がった。

「全く……油断も隙もありやしないわね。ティールリスからの諜報かしらん？」

取り逃がしたか、と目を細め、ラグナを振り返る。

そういえば発砲した割には、王犬を含めてやけに静かだったが。

「大丈夫？ ラグナちゃ……………」

ん、と言う前に、音が喉の奥へ消えた。

少女はぎよつと目を見開いて、ある一点を凝視している。

洗われている王犬らも、ぱちくりと金色の目を瞬いてこちらを見つめていた。

一人と二頭の視線を辿ると、全て同じ場所に行き着く。

つまり、ディートの腰の辺り。

何かすーすーする

思った瞬間、ディートはひくつ、と頬を引きつらせた。

永遠にも思われた長い数秒の後、ラグナは何事もなかったかのよう  
に顔を元に戻し、わっしやわっしやと王犬を洗い始める。

二頭の下洗いは済んだので、一頭ずつ念入りに。



「……………ラグナちゃん」

「何も見てません何も見てません」

「……………ラグナちゃん？」

「洗いの基本！」

「!？」

突然少女の口から飛び出た大声に、泣く子も黙るペンネ家の当主はびくっ!? と震えた。

「水はぬるま湯！」

「色物と白物は分けて！」

「無生物は適当に！ 生き物はイタキモで！ 指の腹と手の平でまんべんなく揉む！」

「いっち・にい・さん・し、とリズムカルに揉まれ、気持ち良さそうにタイルの上のびる黒い毛玉。」

ぶらす。

「ぐがあああ！と理解不能な雄叫びを上げて現実から洗濯に逃げる緑のチビ魔術師。」

ぶらす。

それらを羨ましそうに眺める黒い毛玉もっいっちょよ。

異様だった。

焦ったのはデイトである。慌てて足首のあたりでぐずぐず潰れていたズボンを引き上げると、ラグナを正気に戻しにかかった。

「これぞ洗濯の王道！ 師匠のドロッド口服に鍛え抜かれた洗いの技術舐めんなやあああああ！」

「ちよっつとラグナちゃん!? 本当にごめん、悪かったからこっち

に戻ってきてええええええええええ！？」

数秒経った。

当主の声に何事かと駆けつけてきた家の者たちは、事態を把握しきれずに呆然と突っ立った。

数分経った。

手に負えないからと呼ばれてきたスイートは、「何このナイスシユール？」とコメントを残すが、やはり事態の沈静化には至らず。

十分ほどを過ぎたところで、ラグナが「ん？」と王犬を洗う手を止めたところで、ようやく解決の糸口が見えた。

「何でござえますか、これ？」

「……んん？」

事態を傍観していたスイートが覗き込んで、あれ、と声を漏らした。

「何？ 王犬は黒いんじゃないの？」

続いて、ラグナの暴走が収まったことにほっと胸を撫で下ろしつつ、デザートが参加。

「あら、汚かったのかしら？」

何だ何だ、と集まる野次馬が不特定多数。

「おお？」

「黒くないのか？」

「えっちよっ見せて見せて」

「押すな」

「見えねえよ」

「どうなってるんだ？」

「……あんたら。ちよつと外出てなさい」

堪りかねたディートによって、浴場から野次馬は外に追い出された。

改めてラグナとスイートとディートの三人で、洗っていた王犬二頭を覗き込む。

ちよつどラグナが緩めに放水するシャワーを王犬に当てて、さつと全身の泡を洗い流したところだった。

排水溝へ向かって流れる、大量の真つ黒な泡。

心なしか、王犬の黒い体色が少し薄くなったように見える。

顔を見合わせていると、一人の小間使いが、あー、と浴場の入り口から声を上げた。

「ここに、ペット用のシャンプー買って来てあるんですけど」

『しつこい汚れに効く！ トリマーも愛用』の謳い文句が目につく鮮やかなオレンジのボトルを、ラグナが黙って受け取った。

改めて洗い直した結果。

王犬二頭は体毛が黒色ではなく、見事な銀色であったことが発覚した。

chase - 11 : ナイスショッキング!! (後書き)

前回の次回予告カンペキ忘れてました( - - ; )

**c h a s e - 1 2 : 萎れなくなるサファイアローズ（前書き）**

少し切れが悪かったので長め。女装表現が文中に入ります。苦手な方は注意。

chase - 12 : 萎れなくなるサファイアローズ

「お金」

「あるね」

「旅券」

「ある」

「水筒」

「ある」

「お弁当」

「あるよ」

「日用品」

「揃ってる」

「着替え」

「大体五日分」

「防寒具」

「こんな分厚いコート入る？」

「入らなくても入れてください。アークハウンド 王犬」

「そこにいる。あ、そうだ」

「何でござえますか」

「うん。魔術師ラグナの杖」

「……………ああ、」

「ないの？」

「いえ、あります」

スイートに聞かれ、背中側から『杖』を取り出した。

「今回はちゃんと、スパナとかじゃなくて杖ですよ」

大きなスーツケースの前で、スイートは啞然としてラグナを眺めた。

「……………それ、確かに杖だけどさあ」

「何か不満ですか？」

杖を軽く掲げると、きらり、と銀の持ち手部分の鷲が目を光らせた。丁寧に作られた石突きも眩しい。

「……紳士用ステッキって、やっぱりちよつと違つと思つよ？」

「良いんでござえますよ。使えれば」  
わふつ。

銀色の犬二頭が、ラグナの隣で頷くように吠える。

「まあ、それなら……でもやっぱり間違つてない？」

まだ納得できなさそうな顔で、スイートはスーツケースの蓋を閉めた。

「さて。最後の確認もできた事だし、行こうか」

「……そうでござえますね」

軽く首を縦に振る。

そうして目を窓の外へやると、もう空の端が赤くなり始めている所だった。

ティールリス方面へ向かうためには、鉄道を利用する。とはいっても、彼の帝国との衝突によって、民間の利用は一気に減った。軍用車両が発車する合間に一本あればいい方だ。

その一本ですら、夜も遅くから出発する。

ティールリス帝国とミゼットの国境周辺から、早々に退避を求める人々を迎えに行くためだ。一日半をかけて、二日後早朝にようやく到着するのである。

スイートと黙って顔を見合わせ、二人で部屋を出ると、夕日の中、静かにペンネ家宅を後にした。

デートとは、既に別れを済ませてある。

「……行った？」

「の、ようでございますよ、御頭」

斜陽の光が目にも痛い。カーテンの影から窓越しに、出て行く二人の様子を眺めると、ディートは頷く。

「そう……でも、無事にティールスを通ってリディンスまで行けるかしらねえ？ 一応、我らが誇りの詐欺姫スィットエイシャがいるけども」

「……それは、どういう意味で？」

一緒に見守っていた部下の一人が、そう不思議そうに声を上げる。ディートは決してスィートの実力を過大にも過少にも評価していない。正しく娘にできる事を推し量る技量を持っている。

そして、スィートが一緒ならば、治安の悪化が懸念されるティールスを渡っていくにしても、十分に用は足りる。

だが、そのディートでも、何やら胸騒ぎをさせるものがあつた。

「なーんかねえ……臭いのよ。王犬二頭を故郷へ放しに行くのはね、魔術連盟からの要請だから分かるわ。でも、その二頭を運び入れたのはティールス、そしてそれを奪取した、私たちペンネ家の人間だつた」

そこで一息ついて、ディートは声を低くする。

「……どおもどっかの誰かに程よく利用された感じが拭えねえ」

発言に、息を呑む気配がした。

「おまえら、一応家ウチの人間全員の素性を洗い直せ。新入りだけじゃねえ、五年と経つ奴らもだ」

「黒は」

「吐かせて、潰せ」

即答すると、ディートは懐から拳銃を取り出した。

「？」

目を瞬かせた部下の横で、右手の壁に向かって発砲する。



突然の破裂音に、全員が僅かに身を固くさせる中、壁の向こうがどたばたと騒がしくなった。

時折飛び交う怒号は、全て聞き慣れたペンネ家の人間のものだ。いくらかすると静かになったが、しかし、いつまで経っても、報告は何も来なかった。

部屋に立ち込める硝煙の匂いを吸い込み、ふいー……と、空気が漏れるような音で、長く溜息を吐いた。

くい、と銃を持った方の手で指を曲げると、心得た一人が部屋を出て、敢え無く沈められた彼らを回収に向かう。

ドアが閉まる音の余韻も消え、静かになった時、呟いた。

「……まあ逃げられたか。面白くねえの」  
壁についた焼け焦げ穴を横目で睨み据える。

「ハ工風情がちよこまかと……家に喧嘩売るたあ、とんだマゾ野郎だ、な」

唸るような声に、背後にいた部下たちは黙したまま、それぞれに顔を見合わせた。

\*

ラグナとスイートが北に向けて旅立った頃　ミゼット王国軍少将、シグマ・アルスミードの姿は、トラク市内にあった。

現地の軍司令部の一角にある空き倉庫の中で、シグマは腕をこまねき、とある巨大な木箱をじっと見下ろしていた。

四方が二・五メートル、高さ一メートルはあるかと思われる正方形の木箱。

と、木箱と無言で向かい合う軍のトップクラスの司令官。

「取り合わせが不気味過ぎます」とは、誰の言だったか。

とにかく、今回の軍事衝突といった非常時にとある条件がそろっていると、現地ではこんな光景が必ずと言って良いほど目撃される。

少将宛てに謎の荷物　しかも、かなり巨大な荷物が届き、それを少将は何の疑いもなく開封するのである。

無警戒なのではなく、警戒する必要も無いと断定している様子で、今回も腰に携えた剣で嚴重に巻かれていた縄を切断したシグマの姿を、ついてきた部下二人　つまり、シグマ付きの副官アイネ・グレイスト、第九師団所属のリザ・カリス中佐は　片や微妙な面持ちで、片や陶然とした顔でそれを眺めていた。

「ああっ、今回も無事に届きましたのねっ！　毎度お手数おかけしておりますわ、少将」

胸の前で手を組んでいたリザは、さらに顔をとりかしてうつとりと美しい声を上げた。

「構わん。それで即使えるのなら何だろうが戦場に放り出す」

「ああ！　相変わらずの手厳しさ！　少将のようなお人に顎で使われて、兄も幸せ者でありますわ！」

「……役に立たなかつたらどうするのでありますか」  
ぼそりと呟いたグレイス副官の呟きに、シグマは喉を鳴らして笑う。

「犬にでも食わせる」

「ええ、どうぞ……ただ、その時は是非とも、このリザに兄をお預けくださいませ？　最高の形でうちのワンちゃんたちに食べさせてあげますから……！」

「さて。本人がそれを望んでいるかどうかは別問題だが、」

言いながら、木箱の蓋を向こう側へ蹴り落として、シグマは箱の中に薄っすらと笑いかけた。

「どうする、ジェス？」

「……おまえが俺の名前をそうやってちゃんと呼ぶ時ほど恐ろしい時が他にあるだろうか。いや、ねえよな」

答えにならない答えがほとんど囁くように返ってきた。

シグマは、それを鼻で笑う。

「似合っているぞ、サファイアローズ青薔薇姫」

「今日もおまえは鬼の度合いが絶対調だよなあ、サティステイクジェネラル鬼畜將軍。そろそろその頭を蜂の巣にしてもいいか？」

散弾銃の銃口がゆつと箱の縁から顔を出した。続いて出てきたのは白く粉をはたかれているものの、無骨な男の手である。その次に見えたのは、見事に自前のやや長めだった金髪を美しくシニヨンに結い上げられて、盛大に不機嫌そうな色を蒼い瞳に浮かべているジェスのしかめっ面だった。髪飾りの青い薔薇が相当に鬱陶しそうだったが、他にも同じような青い薔薇が、ジェスに着せられた白いたつぷりとしたレースドレスに贅沢に飾り付けられていた。

彼は今、木箱一杯に広がる青い薔薇の海の中に立っている。

それはまさに、御伽話に出てくる幸運の王女、サファイアローズ青薔薇姫そのもの。白く透き通って、触れれば儂く解けてしまいそうな肌。ふわふわした頬には絶妙な具合で紅みが差し、唇は誰もが思わず口付けたくなるほどに紅くぼつてりと、瑞々しく色づいているのだ。

「意地悪な魔法使いの老婆に育てられた絶世の美女は、やがて予言によって彼女を迎えに来た銀髪の王子と結ばれて、未永く幸せに暮らす……ああ、なんてロマンチックなお話なのでしょうが！」

ジェスがいろいろと鬱屈した目でシグマの銀色の頭を見た。

「……誰が好き好んで嫁に行くか」

「確かに、貰ってやってもいい程度に美しいが、男の嫁は不必要だな」

「そろそろ黙れ本気で脳天揺らして破裂させっぞ」

「まあいいけませんわお兄様！」

悲鳴を上げたのはリザだった。

「私の幸せな夢が血塗れの惨劇になってしまつてはなりませんか！」  
「しよつちゆうカリス准将に仇為す輩を端から沈めている貴女が言つても、何の説得力も持たないのでありますよ、中佐」

「いいえ、そんなことを言つては駄目よアイネ。私は美しいお兄様を、より美しく！ 至高の耽美な世界へ！ じわじわと墮落させていくのを使命としているのよ！」

「その使命からくる言動は、そろそろ国の命を実行するために切り替えてもらいたいのですが」

頭痛を覚え始めたのか、こめかみを揉みながらシグマの副官は助けを求めるようにこちらを見やる。

その視線を受けたシグマは、

「……とりあえず、おまえはもうそのまま戦場で暴れてもらおうか」

「シグマ。俺は准将だ」

「ああ。だから前線で士気を盛り上げてやれ」

「違つがあああああああああうだろ！ 俺〓准将！ 俺〓司令官！ 第九師団が俺の指示を待ってるつつのに、どこの世界にわざわざ将校が先陣切つて向かつてく戦場があるんだよボケ！」

そもそも狙撃手が前に出てどうする！？

ドレスをばさばさと宙へ捌いて暴れるジェスだが、リザがよつぽど計算して飾り付けたのか、それすら一種のダンスを踊っているようにしか見えなかった。

「……で？ 結局俺もおまえも目当ての人間オンナは手に入れられずつか？」

ぐいぐいと頭のシニオンを解こうとして引つ張りながら、ジェスが聞く。

副官に命じてリザ・カリス中佐を摘み出させたため、現在空き倉

庫の中にいるのはシグマとジェスの二人のみだった。

軍事衝突以後の事態の推移を報告する書類に目を通していたシグマは、その言葉で視線を上げた。

「ペンネの頭領にしてやられた。弾丸一発でああも呆気なく事の収拾をつけるとは、相変わらず食えない男だ」

「つか、間違っても俺たちは准将と少将だったんだぞ。普通にそれを蹴り倒すとかぶっ飛ばすとか、クソ強えよあのオッサン。あれであの顔でだぞ。もう成人した娘がいるとかって……幾つだよ」

「今年で四十三じゃなかったか」

聞いた途端、「うわ、」とジェスの顔はさらに苦いものになった。「やっぱ化け物だった……」

「夫婦揃ってあそこは厄介だからな。かといって犯罪ばかりを相手をしている訳でもなく、市民活動にも広く浸透している。治安部も相手を焼いているそうだ」

「ひーおっとろしい」

「おまえはその『おっとろしい』相手の娘を狙っているんだろうが」「それを言う資格はねえぞ。おまえなんか翠みどりの魔術師なんて女を囲おうとしてたんだからな」

「……………」

「……………」

互いにしばらく、顔を見合わせたまま沈黙する。

先に顔を逸らしたのはジェスだった。

「よすか……今はこの謎の軍事衝突を何とかして、サービス休暇を  
もぎ取るのが先だ」

「だろうな」

ジェスの言葉に、シグマは小さく頷いた。

chase - 13 : 悪いコにはおしおき

昨日の夕方にティーリスへ向けて旅立ってから、おおよそ半日が過ぎていた。

夜通し走り続けた列車は、道中、特に大きな問題に遭遇することもなく、北への旅は順調に進んでいる。

客室の窓のカーテンを開けると、さあっと朝の日差しが部屋の中に差し込んでくる。

昇ったばかりの太陽の眩しさに、思わずラグナは顔を背けてしまった。

「……今日も、良い天気でごぜえますね」

呟いた時、後ろのベッドから呻くような声が聞こえてきて、思わず笑みが零れた。同じようなことを感じたのは、ラグナだけではなかったらしい。

「っ　なに。眩しい、ラグナ」

「スイート……朝でごぜえますよ？」

呆れてラグナが言うと、スイートはベッドから起き上がって眠そうに目を擦っているところだった。

「あー……背中痛い。きつとベッドが硬いんだね、これは」

盛大に寝乱れた髪を掻き上げて、彼女は言う。寝心地の悪さに何度も寝返りを打ったのはラグナにも覚えがあつたので、苦笑しながら頷いた。

「　にしても。今日でようやく逃走六日目、か」

独り言のように呟いたスイートは、ラグナに蒼い瞳を向けた。

「ねえラグナ。アルスミード少将に王犬の選定を解除させる方法は思いついた？」

「あー……まだ、でごぜえますが、」

言われて、ラグナは顔から表情がなくなっていくのが分かった。

答えに詰まり、床を見下ろす。

「……………結局、どうしたって問題はそれなんでござえますよね」  
頭を抱えなくなった。

追いつかれれば捕まる。しかし逃げ続ければ、魔連からの依頼を果たすことができない。

シグマと距離を離す絶好の機会だというのに、どころか接触しなければならぬという問題。ぶち当たった壁は大きかった。

しかも、シグマが軍事衝突の件で指揮を取っているのは、ラグナの師が住んでいるトラクだ。いろいろな不幸が重なるというのはまず、滅多にないと信じたいが、起こり得ないことではない。

もし、シグマとラグナが王犬騒動の時のようにごたついている場合に、あの師が乱入したら

「考えたくもねえでござえます」

「え？」

「あ、いえいえいえいえ」

ふるふる頭を左右に往復させると、ラグナはふと、その動きを止めた。

……………そう、だが、やろうと思えばやれないこともないのは確かだ。そのための権限を、ラグナは持っているのだから。

だが　もしこの依頼を完遂したら。その後、自分は一体どこに行くというのだろうか。

思いながら、ラグナはスイートに告げていた。

「一応、当てはあります」

「……………あるの？」

「あい」

頷いた。

「ただ、それには少しだけ時間が必要でござえますがね。すぐにも、ある程度までできないことはねえんでござえますが……やつぱり、時間はかかります」

「そっか……じゃあ、全部の準備にどれくらい必要なの？」

「二、三日程度です」

ラグナは宙に視線を投げて、少しばかり計算した。例え今頭に浮かんでいる手段を講じるにしても、自分一人だけではできないことばかりだ。

「魔連と話をつけて、そこから遣り取りを幾つかして、さらに魔連が動いてくれるのを待たなければなりませんから」

話を聞いていたスイートは、ん、と眉を寄せた。

「魔連が出て来るってことは……ひょっとしてそれって？」

「あくまで最後の手段です。使わないに越したことはねえんでござえますよ。後は、使うのを私が想像したくないと言いますか」

ラグナは肩をすくめてみせた。  
「でも、奴に会わなければならないのは、確定なんでござえますよね」

「……会いたくない気持ちは、この前の件で十分に理解できたよ。あれは確かに面倒だね」

はっとラグナは顔を上げた。スイートが同情の眼差しで痛々しげにこちらを見てくる。

やはり、スイートは分かってくれるのだ。

「やつぱり、末期でござえますよね？」

「うん。ロリコンのね？」

「いえ」

思わず肩が落ちた。

少し前にも、似たようなことを言ったはずなのだが。

「アレは、ただの鬼畜です」

再度訂正してから、ふと、気付く。

「そういえば、<sup>アイクハウンド</sup>王犬たちはどうしたんでござえますか？ 昨夜寝る



時は一緒だったと思ったのですが」

「ああ……」

スイートはあくびを噛み殺しながら、

「夜中に廊下に出ちゃったみたいでさ。添乗員に回収されて、今は家畜の車両に檻ごと突っ込まれてるって」

「……それは……自業自得というか、何というか」

外に出るなと注意したはずなのだが。

ラグナアー

くうん、と遠くから、助けを求める切なげな鳴き声が聞こえた気がした。

「……鳴いていますね」

「分かるの？」

「まあ、一応は」

「ふうん……。……。……?」

「どうしたんでござえますか、スイート」

急に枕の下をまさぐり始めたスイートは、ラグナをちらりと一瞥する。

「何か変だよ、ラグナ。今、小さな物音がした」

「え?」

聞き返した時、スイートが小さな回転式の拳銃を枕の下から抜き出した。

列車の揺れをものともせず、音もなく彼女は窓に寄った。

「……外?」

「たぶん」

ラグナも自分のベッド脇に紐で吊ってあった紳士用ステッキを手

に取って構えた。

目の遣り取りだけで、タイミングを見計らう。

「おかしいと思ってたんだよ……前々から視線を感じていたもの」  
スイートが呟いた。

彼女が窓を勢いよく開け放つと、風が勢いよく部屋の中に雪崩れこんできた。

構わずに上体を乗り出して、スイートが列車の屋根に向かって拳銃を構える。ラグナも拘束の魔法を宙に描き、窓の外へと投げた。

「っ！」

だが、手ごたえがない。

「……逃げられた!?」

「父が言っていた通りだ」

風に紛れて、スイートが体を戻しながら声を漏らした。

「……相当に逃げ足が速いね、あれは。影すら見えなかった」

窓を閉めると、スイートは腕をこまねいて嘆息した。

「全く。あんな不安要素を抱えたまま国境まで行くななんて。……それでなくても、アルスミード少将のことだけで先が思いやられるっていうのに」

ラグナは、スイートの言葉に黙って頷いた。

姿の見えない追手。一体、どこから、何のためにやってきたのだろうか。

その後は、朝食の時間になっても、昼を過ぎても、夜になってベッドに潜り込んでも、追手の存在のことが常に頭を離れなかった。結局、国境が近づいた夜更けまで、二人で浅い眠りを繰り返すことになった。

\*

「っ、疲れた……」

「夜中までがさごそしてたよね、例のヤツ……鬱陶しいったらないんだけど」

朝方、ようやく終点に着いた列車を降りて、ラグナとスイートは運良く一つの食堂に入ることができていた。

テラスでふわふわと温かい日差しを浴びながら、軽食をとる。

時折足元でじゃれてくる王犬らにハムなどを与えていると、『ラグナスキー』やら『ニクー』やら可愛い思考が聞こえてきて、半分徹夜明けながら、思わず笑みが零れた。

昨日からささくれ立っていた気分は、気持ち程度にはましにはなっていたと思う。

ただ、目の前の光景を見ると、それも綺麗さっぱり吹き飛びそうだとラグナは感想を抱いた。

原因はスイートの奇怪な行動だった。

甘酸っぱそうな果物のジュースには目もくれず、旅の相棒は物々しいマスクとサングラスをして、綿を巻きつけた木の棒片手に、無心に銀のロケットの中へ何やら黄色い粉を詰め続けていたのである。どこからどう見ても不審極まりないが、人気がないだけに、テラスで公然とやってのけている。

幼馴染の豪胆ぶりに呆れ返ったものの、ラグナはスイートの集中を乱さぬよう、そっと尋ねた。

「……それは？」

「追手対策」

スイートのくぐもった声が返ってきた。

「いい加減にムカついてきた。ボクのこの調合で骨抜きにしてやる」  
「……ほどほどに」

詐欺姫と謳われる彼女は、何も演技や言葉だけが武器ではない。

銃も扱っし、ナイフだつて振り回すし、立派にペンネ家のじゃじゃ馬気質を継いでいる。

しかし、何が一番怖いと聞かれると、ペンネ家の皆が口を揃えて言う。

『いつの間にか姫の毒薬の実験台にされていること』

致死の毒を扱うのではないが、『じわじわと来る』のだそうだ。何が聞けば、全員が口をつぐんで黙秘を貫いた。

「……よし」

いつになく低い声が聞こえて、別に試される対象になった訳でもないのに背筋が震えあがった。

何だろう。怨念染みたまのまで感じてくるのはなぜだろう。

こつ、と、スイートが三脚の生えたロケットをテーブルに置く音すら、やけに静かな町に響いていた。

蓋が開いたままだが、閉めなくていいのだろうか。

ラグナが見つめていると、スイートは薄く冷笑した。

「いい、ラグナ？ これを乾燥させて」

「……あれで湿っていたのでごせえますか？」

「最小限でないと駄目になるからね。ほら早く」

「……」

大丈夫か、と心配しつつ、ラグナはステッキの鷲の頭で、さりさりと宙に魔法の紋様を描いた。

「 乾け」

魔法が発動した。

鈍い爆発のような音が響き、ロケットが淡い緑の炎に包まれる。

しばらくして乾燥が終わり、何事もなかったかのように静かになったテーブルの上には沈黙が落ちた。

何も言わずに、スイートがジュースのグラスを取り上げて、ラグナの方へと移動する。さり気なさ過ぎて、その行動が何を意図しているものなのか、全く見上げたラグナには分からなかった。しかし、王犬らも何らかの気配を察してか、スイートの後方へと二頭そろってちんまり座っている。

困惑してロケットを見下ろすと、中の粉はじんわりと、黄色から刺激的な赤色へ変わっていた。

何も起きないまま十秒が経った頃、さらつと風が吹いた。

「あ」

水分を失くし、砂漠の砂のように軽く乾いた粉が、ロケットの中から舞い上がった。

「……………え」

風に乗って飛んだ粉は、それこそ町中に行き渡る。

スイートがあれだけ息巻いていたのだから、有害でないはずがない。

「今日は良い天気だねえ」

焦るラグナの後ろで、スイートがずらしたマスクの間から、ずずつ、と呑気にストローを啜った。

「知ってた？ ラグナ。この間のティーリスの襲撃で、それこそ蟻の子を散らすみたいに、北境からあの列車で人が出て行ってね。今じゃ町には、駅が直接運営しているここぐらいしか人が残ってないんだ」

それも今日の昼にはいなくなっちゃうらしいよ、とスイートは淡々と言う。

しかし。

「だから別に、町に今毒を撒き散らしたって問題はないんだけど、」  
にやつと笑う音が聞こえた気がした。

ラグナが軽く戦慄したその時、やや離れた町角から絶叫が上がった。

「 !? 」

言葉にならない苦悶の声にぎくつとしたところで、スイートの、  
楽しそうな、楽しそうな声が聞こえたのだった。

「風下で盗み聞きしていた悪いコは、大変なことになっちゃうよね  
え?」

スイートが言って、問題の町角から人影が悶えるように転がり出  
てくるまで、それほど時間はかからなかった。

chase - 13 : 悪いコにはおしおき (後書き)

薬物・劇物に関してはスイートの独壇場!?

黄色い粉については黄リン・赤リンがモデルです……安全性が逆じゃないかと。ちなみに空中で酸化によって炎上したりはしません(笑)

## chase - 14 : 八割方がアレのせい

ラグナとスイートをつけていたのは、若い黒髪の男だった。スイートの強烈な薬品のおかげで涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっているが、顔はまあ見れる程度といったところだろうか。服装も普通にどこかをぶらぶら歩いていそうな感じの人間で、全く追跡の技術に長けているように見えない。

ラグナが眉を潜めて縄で縛られた男を見下ろしていると、スイートが隣で、荷物から取り出したマツチに火をつけた。途端に、ぱつと明るい青色の炎が空中で燃え上がる。

「燃やせばただの煤になって無毒化できるんだよ」  
「……なるほど」

何をどうしたらそんな便利な劇物が作れるのか。知りたいが知りたくない。微妙な心境だったラグナは、スイートの作る薬についてはすっぱりと忘れることに決めた。

さて、問題は男の方だ。

薬品を無毒化した後、スイートは男の傍にしゃがみこんだ。抵抗を防ぐ少し特殊な縛り方をしていたので、そのあたりを緩めたのだらう。

「ん、よし。これで安全。一丁あがりだよ、ラグナ」

手を叩いて払うスイートは、きつともうそこらの暗殺者などでは敵わないに違いない。ラグナは密かに思った。

「……にしても。この男、結局どこから来たんだらうね？ 薬のせいでしばらくはまともに喋れないだらうし……いっそのこと神経焼き切れちゃうくらい強烈なアレとか使おっかな？」

「……スイート」

「ん？ なぁに、ラグナ」

「捕縛者と向き合うのは一向に構いませんが……拷問方法なんかは、ここにこと考えるものではねえと思うのでござえますよ？」



「……………ん？」

スイートの笑みが固まる。

そこに、溜息一つを落として、ラグナは止めを刺した。

「それじゃあのアホンダラと同じおんなでござえますからね？」

「……………」

スイートからの答えはない。

しかし、たつぷり数十秒そのまま停止していた友は、静かに荷物から『刺激消し』とラベルの貼られた霧吹きを取り出した。

そして、ぷしゅつとひどく気の抜けた音と共に、無言で中身を男の顔に吹きかけたのだった。

仕切り直して、ようやく尋問が始まった。

男の頭の上から、王犬の片割れが尾を振りながらラグナをじつと見つめてくる。

銀色の小さな額を指先で搔いてやりつつ、ラグナは口を開いた。

「それで、あなた様はいつたどこから来たんでござえますか？」

「……………ディーリス……………」

ろくに舌も回らない様子で、男は項垂れながらも、ぼつぼつと尋問に素直に答えていった。

曰く、自分はディーリス出身で、依頼を受けて間者として活動するのを生業にしていること。

曰く、ラグナとスイートを追っていたのは、ディーリスに雇われたからだということ。

しかし、

「……………何ですって？」

「反乱軍？」

男は、ティーリスの反乱軍に属していた。

男の話を聞き終えたスイートは、狐に摘まれたような顔で、「反乱軍……」と繰り返して呟いた。全く訳が分からずに混乱しているようで、こめかみを叩いて考えている。

ラグナはしばらくぼんやりとしていたが、はたと気づいて訊ねた。「ということは、国に言われて私たちを追っていたのではなかった、ということでご座えますか？」

「そうだよ」

ラグナの問いに、男は拗ねたように顔を背けた。

「大体、国に雇われるような間諜が、ここまでぺらぺら吐く訳ないだろ。……故郷の連中に頼まれたんだよ。ある魔術師の女がミゼツトにいるから、探して生け捕りにして来いってね」

「ってことは、君はまさに反乱が起きているティーリス北西部から来た、と」

スイートが整理するように言っつて、ラグナもまたその事実を目を瞠った。

「ティーリスでは内乱がそんなにひどくなっているのご座えますか？」

「少なくとも、反乱を起こした連中は相当頭に来ているね。国への不満が爆発したんだろう」

男はげんなりと言った。

「ここ数年、ティーリスは空の様子が異常だったんだ。例えば、定期的に春なのに、俺たちの住んでいた場所は重く雪が降り積もるぐらい寒かった。かと思えば夏の陽射しは容赦なく照りつけて酷暑で病人が多く出たし、たまの雨はまとまって降りはしても、水害ばかり引き起こして、大地を潤すことはなかった。おかげで農地は壊滅、頼りにしていた山地の湧き水も今年は例年より少ないそうだし、飯の種どころか、今日明日を生きるのでさえ危ないかもしれない、

って状況かな」

「国はきちんとそれに対応しなかった？」

「しなかった。というよりできなかったのかもしれない。異常気象が起こったのは北西だけじゃない。全く反対の東南でも起こっているらしい……北西部より影響は大分少ないそうだが。それに、数年前に、おたくとでかいのをやらかしてるしな」

「でかいの……ああ、スヴェナ戦争」

スイートが納得して頷いた。

「確か、当時のシグマ・アルスミード少佐が劣勢に立たされたミゼット軍内で上層部を動かして、大逆転の勝利に導いたんだっけ？」

「ちょうどあのアホンダラが名を流し始めた時期でございましたが、また悪い時分にウチに喧嘩を売りましたね？ 向こう数年立ち直れないだろうってどっかの国で経済論者が苦笑するぐらいの大負けだったんでござえましょう？」

「……うん……分かつちやいるけどさ……面と向かって言わないでくれないか……」

男は肩を落として意気消沈していた。

「トラクでの軍事衝突の話は聞いてる。だけど、ミゼットの助力なんか、ティーリス帝国は端から当てになんてしてないだろうさ。目的はシグマ・アルスミードただ一人。その為の手はもうすでに打ってあって、あとは必要なものを手に入れるだけなんだから」

「必要なもの？」

「分かるだろ？」

スイートの問いかけに、へら、と男は笑みを浮かべる。その力の無さに、ラグナは薄ら寒いものを覚えた。

しかし、笑みを消した男は、先ほどの気迫の無さが嘘のように、静かにこちらを見つめてきた。

「あんただよ。『翠の魔術師』<sup>ラグナ・キア</sup>」

一瞬、激しく全身が震えて、稲妻が身体を通り抜けたかと思った。「あんたがティールリスの明日を左右する。魔術師連合がそう言ったんだ」

青天の霹靂のように、ぱたりと、男の言葉はラグナの胸に染み込んだ。そして、染み込んだ言葉は容赦なくその心を打ち据えたのだろう。

急に重くなった鳩尾を押さえ、ラグナは絶句して目を見開いていた。

「……魔連？」

隣で、何か糸が切れたように、スイートが呆然と口にする。

どうして、と唇が動く。

「何で、そこで魔連が出てくるんでござえますか……？」

聞かれて、何がひっかかったのか、男は妙な顔をした。

「ありえねえでござえます。魔連は普段、特定の国の政情なんかに口出ししません」

ラグナは首を振った。

「そうなのか？　だが、反乱軍の奴らが出会ったのは間違いなく魔連の魔術師だったそうだぞ？」

男の言葉に、ラグナは眩暈のする心地を覚えた。

魔連は魔術師の人権を守るためだけに作られた国際組織だったはずだ。魔術師を保護するための活動をするならまだしも、一国の内乱に介入するなど、ありえない。

しかも、自分はその駒になっているという。何が起きているのか分からなくなってきた。

「ああ……そういうことなんだね」

スイートが顔を歪めて苦々しげに呟いた。

「ラグナ、まずいことになったよ」

呼びかけられて、ラグナは顔を上げる。スイートは眉根を不快そうに寄せて、男を睨んでいた。

「帝国自体からも、ラグナを捕まえる動きはあるはずだね？」

「十中八九、確実に」

男は小さく頷いた。

「スイート、まずいとはどういうことでござえますか」

「どういうことも、まずいことになったからまずいって言うてるんだよ、ラグナ。ティーリスは国が二つに割れかかっている、しかもボクらはあの少将に加えて、さらにティーリスの反乱軍と政府軍の両方からも狙われる羽目になっちゃったんだから。……ああもう、悪夢だ。何で鬼畜將軍に加えてこんなにしち面倒なのばかりくっついて来るんだろ！」

「や、この事態は良く考えたらほとんど全部あのアホンダラのせいだ、ラグナはぼそつと呟いた。

天候の悪条件は抜きにしても、この内乱を起こすことになったのは、国側が先のミゼットとの戦争で、シグマの指揮によって大敗し、民衆の生活の保障ができなくなってしまったからだ。

そしてまた、今までの態度を一転してミゼットに助けを求めるほど内乱平定に困ったティーリスは、かつて苦しめられたシグマの手腕に縋る思いでもあるのだろう。腸が煮えくり返るかよじり切れるか、とにかくよほどひどい思いで決断しているのかもしれない。

反乱軍は反乱軍で、なぜかラグナを呼び込もうとしているが、帝国内側がラグナがシグマの愛人であったという情報を掴んでいるため、あちらにも情報が渡っている可能性は高い。そこにどうして魔連の魔術師が絡んでいるのかは、ひょっとしたら直接確かめる必要があるが。

だがしかし。

どう考えても八割方、これはシグマが原因で起こった内乱ではな  
かるうか。

ほぼ暴論に近いと言われそうだが、なまじつか真実であることが  
一番の迷惑だとラグナは思った。

(てめえの尻拭いはてめえでやってほしいものでござえますよ……)  
思っで、密かに溜息を吐く。

「別に俺は、あんたを連れて来ることにはこだわっちゃいない  
よ。どつちでも良かったんだ。内乱なんかで故郷の奴らが不幸にな  
るのは避けたかったが、だからって協力をしたい訳でもなかったか  
ら……魔連が絡むのも納得できていない。俺はそれが必要だと判断  
するなら、あんたたちを反乱軍と政府軍の両方から隠してリディン  
スに連れて行くつもりだった」

「ふうん？ で、それを信用しろってボクらに言う訳？」

渋い顔でスイートが聞き返したが、男は軽く肩をすくめただけだ  
った。「信用に足ると証明しろ」と言われても、何とも言いようが  
ないのだろう。

しかし、彼がティリス国内に詳しいとなると、これは……渡り  
に船、なのかもしれない。

「……連れて行きましょう」

「ラグナ？」

スイートが驚きと困惑の声を上げたが、構わずに男の前に出ると、  
ラグナは彼の青い目を見据えた。

「名は、何と呼べばいいのでござえますでしょうか？」

「……え、と、」

きょとんと目を丸くして、彼はうるたえながら、

「ス、レイ。スレイ・エフシュタン」

「では、スレイ。まず私を、北西部まで連れて行ってくださいえやせ

んか」

「ちよ……ラ、ラグナ」

振り返ると、ラグナは微笑む。

「スイート。こればかりは、実際に行つて何が起こっているか、見極める必要がありやせんか？ 駄目だと思つたら、私の魔術で逃げればいいのでごせえますよ」

「……そうだなあ」

スイートは落ちてきた前髪を後ろへ撫でつけてから、少し唇を尖らせた。

「確かに、情報は少ないものね……仕方ない。ラグナがそこまで言うなら、しばらくは良いよ。でも、変な真似をしたらすぐにその辺に縛つて転がしてうっちゃってくからそのつもりでね」

スレイはほっとした様子で息を吐いた。

「ああ。しばらくよろしく頼むよ」

chase - 14 : 八割方がアレのせい (後書き)

今回は全てラグナたちティールリス組の回。

次回はちょびつとシグマらトラク組が登場します。



chase - 15 : トラクの獣(前編)

「やはり足りない」

シグマが呟いたそれは、唐突な一言となつて司令室に響いた。

シグマが座る机の前で、ジェスはいつも中央司令部でしているようにソファに足を組んで腰かけると、ぽつと漏らした。

「やる気あんのかあいつら？」

「む……」

机の上のトラクの地図を見下ろしながら、シグマは違和感を感じていた。

「いまいち戦闘に『張り』というものがない。

辺りに鳴り響く銃声と怒号。しかし、一兵卒時代からいくつも前線を掻い潜ってきたシグマとジェスにしてみれば、まるでお遊びのように緊張感が感じられない。締まりのない戦闘だ。

一応、敵味方双方の砲撃の為に、町は北部が半ば瓦礫地帯と化しており、残った壁なども歩兵らが銃弾を避ける一時の場所として機能している程度で、それもやがて崩れてしまう、といった状況ではあるのだが。

「これまでの進展具合からして、戦闘は激化するか、あるいは……と考えていたが。やはりな」

「あ？」

「……向こう側が対談を申し込んでくる可能性がある」

シグマは首を傾けながら、地図を畳んだ。

「……シグマ。おい、シグマ。一つ突っ込んでいいか」

「何だ」

「おまえ、普通に思考を繋げ過ぎだ。もうワンクッションそこになんかあるだろ」

「どこに」

「進具合だけで『今の状況がやたら弛んでる』から『敵側からの対談の可能性』へ推測が飛躍できるか。どっかでおまえ、自分独自の情報から何か一つは付け加えたはずだろうが」

「……ああ」

納得して、シグマは指で、窓から見えるトラックの町を示した。

「ジェス。町のずっと向こうに何が見える」

「……町の向こう？」

言われて、ジェスは怪訝気な顔でソファから立ち上がった。彼は狙撃手としての習性か、壁に身を預けてから、外の様子を見た。

いくら町のあるところから煙が立ち上って視界は悪いはずだが、ジェスの目なら、どうにか見通せるだろう。当たりをつけて返答を待っていると、ジェスが「あん？」と疑問の声を上げた。

「なんだありや……国境付近で地面の様子が手前と向こうでずいぶん違うぞ」

「干からびているだろう。ティリス側が」

「いや、分かるが、変だろう。こつちとあつちでその日の照り方や土の質が違う訳がねえ。雨だって降ったはずだ」

「だろうな」

シグマは頷きながら、ふと、首を傾げるジェスを横目で見ながら思う。ここから少しヒントが必要になるだろうか。

だが、心配は無用だったらしい。

考え込むジェスの目の色が、ある時点を境に変わった。やや驚いたように目を丸くして、ジェスは小さく訪ねてくる。

「……シグマ。おまえ、そっぴやラグナを捕まえたのはいつだ？」

「さて、いつだったろうな」

口の端を吊り上げる。

やはり、ジェスは昔からの付き合いだけあって、必要な情報の手がかりさえ掴めば頭の巡りは早い。

「何でだ……？ 確か、あれは……スヴェナが起こったのは」  
「四年ほど前だったか」

懐かしい話だ。まだ下士官だった頃か。

スヴェナ戦争中、敗戦の色が濃い中を、軍上層部に殴りこむように交渉をかけた事が叩き上げ出世の契機だった。特例で階級を少佐辺りまで引き上げ、大佐、中佐相当の権力を得て戦場を二人で駆けずり回ったのだ。気が付けば戦争はどうか勝利に終わり、周りからはすっかり英雄扱いされて、大逆転に沸き立つ民衆の中を、疲れ果てながらも凱旋した覚えがある。

その後、この一件でシグマらの意見を採用したとある将官の推薦により、その後正式に将校として大佐、中佐への大出世が決まったが、戦争の事後処理で将校級の教育を受けるどころではなかった。しかし、数か月後にまた小さくはない戦争が予想されていた当時、即主戦力として組み込める二人の能力はあちこちから欲しがられた。制度上は士官に採用するためとはいえ、急遽特別試験が課されたのである。

その他、ジェスがシグマと共に行動しなければ成果は半減だとかどうかごねにごねて、結局二人で同じところに配属されたのだったか。

まあ、それはそれとして。

遠い目をしていたジェスは、はっと瞼を押し上げた。ここでようやく全てが繋がったらしい。

「……そういうことか」

ジェスは青ざめた顔でシグマに向き直り、

「ラグナがティールスに魔法を使ってたつてことだな？」

「どうして期待を裏切った。馬鹿かおまえは」

「ぐ」

ジェスの顔面に踵をめり込ませ、壁に寄り掛かって悶絶しだした

彼にシグマは溜め息を吐いた。

「おまえの考えはどうも妙な時に飛躍する」

「馬鹿つて……冗談に……決まってるだろ……ちったあ手加減しろよ……おま……」

と、その時部屋のドアが開いて、マグカップ二つを盆にのせたジエスの妹が入ってきた。

「お兄様、アルスミード少将。リザ特製のコーヒーが入りましたのでお持ちしました……って、お兄様、またですか?」

シグマはリザに近寄ると、カップを盆から取り上げた。

「そろそろこいつに冗談の言い方を教えてやってくれないか」

「……もうそろそろ、兄のTPO概念の欠如については学習なさった方がよろしいのではなくて?」

「無理だろう」

予測しようにもこればかりは限界がある、とシグマは認めた。

「仕方ありませんわよ。兄ったら、狙撃の時のために普段の状況を見極める力がほぼ犠牲になっていますもの」

「おいおまえら。俺をよつてたかってけなして楽しいか……?」

依然壁と一体化したまま、ジエスが沈んだ様子で言った。

「ええ、だつてお兄様ですもの。見ていて私は幸せですわ」

リザはにっこりと微笑む。

「それで、本題に入らせていただいてもよろしいでしょうか?」

「……」

ジエスはしばらく口をつぐんだ後、頭を掻き上げながら呟いた。

「向こう側からの対談だろ」

全て諦めたような口調に、リザの笑みは深くなった。

「さすがお兄様。全て分かっているらしいですね」

「いつもの通り、こいつよりは時間はかかったけどな」

シグマを親指で指し示し、ジエスは肩をすくめる。

「……で。俺たちが行くのか?」

「懸賞がその場に用意されるのは当然の事ですわ」

交渉が勝負なら、自分は懸賞扱いか。勝負や競技でもあるまいに思ってシグマは呆れる。

「やはり、私と准将がティーリスの内乱平定のために、あちらへ支援しに行くという事か」

「はい。ですが、」

続く言葉に、シグマは半分伏せていた瞼を開く。

「あちらの手札が全てお見えになっていても、それでもティーリスに行かれるのですね」

リザを見ると、優雅に微笑む顔からは、どのような含みも感じ取れない。

シグマは小さく笑った。

「乗らない手はないからな」

「つか、おまえの場合はラグナ目当てだろうが？」

「ことこれに関してほど、少将の行動が読みやすい時はないのですわ」

くく、と喉から低く笑いを漏らす。無意識のうちに、舌なめずりをしていた。

「当然だ。アレほど私を昂ぶらせるものは、そうそうないからな」

ちらりと、瞼の裏に鮮やかに緑が翻る。

華奢で小柄だが、どこまでも真っ直ぐな目で面とこちらに向かっていた姿を思い出した。

折りたい。その心を。

嗜虐心が頭をもたげる。

逃げるアレを捕まえて、地に組み伏せて喰らいつく。

痛みに悲鳴を上げるのか、それとも逃れようと足掻くのか。考えるだけで、ひどく愉快だった。

「……………」

「……あー、うん」

リザは何もなかったかのように、ジエスはかける言葉を探すように、目を逸らす。

「とりあえず、まだ『待て』だからな？」

「私が大人しく命令を聞く『犬』だと思つか？」

「いや思わねえけど」

返しながら、どちらかといえば、とジエスは評した。

「おまえ、ほっそい手綱に繋がれただけの猛獣だからなあ……………」

兄の言葉に、リザも何度か頷いて同意する。

「それにしても、彼の愛らしいお方は不思議ですわ。こんな大きな猛獣を狩りに誘ってしまふなんて。一体どのように手懐けられたのですか、少将？」

聞かれて、シグマはリザの青い真円の目を見つめていたが、しばらくしてふつと口を緩ませた。

「手懐けられた、か。妙なる例えだ、中佐。……………そうだな」

さて、どう答えたものだろうか。

「あの小さな舌で舐められて、甲斐甲斐しく世話を焼かれたら……………嫌でも懐きたくなるだろう？」

兄妹は黙って顔を見合わせる。

ジエスは片眉を上げ、リザは両の眉尻を下げてそれに応えた。

微妙な表情の変化で遣り取りをした後に、ジエスが声を上げる。

「シグマ。どっちの話だ」

人か、獣か。

「無論、」

シグマは、部屋を出ながら嗤った。

「獣の話だとも」

知っている。

人でなしは、自分だ。

chase - 15 : トラクの獣 (前編) (後書き)

思ったより長かったので前、後編となります。



ドアを開け、立てこもっていた建物の外に出る。相変わらずそこは銃弾も砲弾も飛びまくる、いつ流れ弾に当たって死ぬかも分からない。読んで字の如く、生き馬の目を抜く戦場だった。

「……………んふ……………」

何とも言えない呻きを上げて、ぼりぼり、と頭の横を引っ掻く。寝起きだ。というより仮眠から覚めたばかりだった。最も、銃声やら砲声やらで煩くて、堪りかねた周りは耳栓を自作していた。

ここ数日、ろくに寝る間もなく、水も湯も浴びず、さらには、そういえば一食か二食ほど昨日から飛ばしている。

どつりでかゆい訳だ、と納得して、針山のような頭から指を引っこ抜いた時。

ひゅんつと肩口を何かが通り抜けた。

突っ立っていた後ろで、ついさっき出て来たばかりの鉄のドアがひどい音と共にひん曲がった。昨日も半分寝ながら直した気がするが、またやるのか。数秒で終わるとはいえ面倒なものだ。

げんなりと振り向いてドアの惨状を目にした時、何とまあ、と思わず声に出して呆れた。

ただの鉄の砲弾かと思ったら、れっきとした火薬入り、爆発する弾だった。不発か、と思っつて、自分の運の良さに腕をこまねき、じつくり感心する。

「……………あつぶね」

「感想が遅すぎますって、トライド氏」

独白に突っこむ声がしたと思うと、すぐ前方、急ごしらえの塹壕から、見張りをしていた若い男の頭がひよっこりと生えた。テイワ―だった。

「爆発していたら『あ』の音を言う暇なく死んでるところですよ」

「いやあ。そこは、俺の人徳ってヤツ」

「普段から出不精してる人が何言ってるんですか」

「ちゃんと外出て働いてんじゃねえかよー」

「はいはい、今だけですがね。それよりもトライド氏、動きがあったようですよ」

「……知ってる」

そうでなければ出て来ない。出て来た時自体がまずかったが。

腰に差した“杖”を引き抜くと、トライドは宙に軽く掲げてから、少し首を傾げた。ややあつて金の鈍い光を放つ獅子頭でさらっと図案を描き、ドアの方に投げる。大砲が当たった時と同じぐらいのけたたましい音を立てて、たわんだドアは元に戻った。

めり込んでいた不発弾も同時に処理されている事実、ほー、とテイワーは感心する。

「さつすが。やっぱベテランは違いますね」

「見惚れている暇があったら、奥で寝こけてる間抜けの豚野郎を起こして来い……昨夜の打ち合わせ通りにやるには時間が鍵だ。遅刻なんてことになったら笑うしかねえぞ」

「御自分で起こさなかつたんですか」

「ケツを蹴り飛ばしたが大めだった」

テイワーは渋い顔をしながら、直ったばかりのドアを開けて建物の中へ入って行く。

「氏が起こせなかつたら俺が起こせる訳がないんすけど」

「大丈夫。魔法の言葉がある」

「勘弁してください。氏でなかつたら俺、あの豚に殺されます」

「いーからやれ。もう時間はそんなにねえぞ」

盛大に溜息を吐くのが後ろから聞こえた。

「後でしっかり守って下さいね」

「ああ」

すうう、と目一杯テイワーが息を吸うのに合わせて、トライドはぼそっと付け加えた。

「保証はしねえけどな」

「おい、豚！ トースキン！ ラグナちゃんがおまえにスリスリしに帰って来たぞ！」

重いものが落ちる音がした。その後でずいぶんと鈍い音がして、誰かが激しく罵り声を上げた。それが豚女トースキンのものか、テイワールのものかはくぐもっていて判然としないが、これだけは聞こえた。

「テイワール！ この大嘘つき！ ラグナちゃんの姿なんかどこにもないだろ！ ころす」

「ちよつ、最後の言葉だけマジ怖いっ！ 助けてトライド氏！ 俺この豚女に殺されますってば！」

「さつきから豚豚と人のことを呼びやがって！ これでも痩せたわあっ！」

生贄の絞め殺される悲鳴を背にしながら、トライドは深呼吸をする。

「……………変わらんなあ」

しみじみと呟いた。

彼らの口論は、空から槍が降ろうが何が降ろうが、ひよっとするとこの世が終わるまで何も変わらず続くのではなからうか。

最も今は、硝煙や煤の匂いと共に、町中を鉄の弾が飛び交っているのだが。

\*

会談の場へと向かっていたシグマを出迎えたのは、ティーリスの兵たちから向けられる畏怖の籠もった視線だった。

司令部を出て、戦闘によってあらかた崩れた市街地を抜ければ、そこは前線の向こう側 敵陣の領域となる。ティーリスの敵陣の真っ只中に、シグマは遠慮躊躇もなくずかずかと足を進めていた。

会談が敵中で行われるという状況に、副官のアイネはもちろん、ジェスやリザも畏ではないのかと警戒している。実際、武器を携帯していても、今攻撃が始まれば一たまりもないだろうが、所詮は仮定の話だ。「起こりもしない危機を憂うのは無駄というものだろう」と言い捨てる、付き添う全員が呆れたような納得したような顔になった。

「おまえの豪胆さを俺は尊敬するよ……」

ジェスが小さくシグマの後ろで呟くのが聞こえたが、反応を返すことはしない。

先導をしていたティーリスの者が足を止めると、向き直ってシグマに軽く目礼をした。

「こちらです」

「御苦労」

一言述べて、シグマはざっと全体を見渡した。他の者の目を遮る意味でだろう、場を四角く区切る形で幕が渡されていた。中の様子は見えないが、おそらく既に向こう側の人間は席についているはずだ。

（そして）

ふと、シグマは思い当たって眉を潜めた。

確か、ミゼットからも急遽、交渉役として外務から人材が派遣されていた。

「あくまで軍事だけにとどめておかなければ、軍上層部に国を喰われかねんからだろうな」とは、ジェスの言だが、本当に上は自分を危険視しているのだろうか。

思い出して、淡く冷笑を口元に浮かべた。

( それほど私が怖いか？ )

頭の端で薄くそんな思考を巡らせつつも、足を踏み出した。幕の中に入り、テীরリス側の人間を視界に入れた瞬間、シグマは違和感を覚えた。

「……やはりか」

「？」

相手が居る手前、好き勝手に発言はできない。ジエスが『どういう意味だ』と目で問うてくるが、シグマはそれに『気にするな』と返した。それからさらに少し考えると、付け加えるように唇だけを動かした。

『直に分かる。会談が終了したら、私以外は全員で急いで外に出る。いいな？』

『……了解。よく分かんが、とりあえず危険の気配はびんっびんにするな』

ジエスが無表情のまま、目をくるりと回した。目は口ほどにと俗に言うが、まさに今の彼ほどその言葉を体で表した男も居るまい。

シグマとジエスがそれぞれアイネとリザを伴って席に着くと、会談は始まった。

交渉役とは事前に何の打診もされていない。つまり、おまえは何も喋るなど言われているということに等しいはずだ。現に、シグマは紹介の際に軽く目線で会釈をしたのみで、一言も発する機会も必要もなかった。

静かに、しかし確かに空気を震わして、相手に威圧を与えようと重い声が飛び交う。発言権が与えられていないのを幸いと、その傍らで、シグマはひっそりと改めて現状の認識を行っていた。

そもそも、事の発端からして通常とはかなり様相を異にしているのが今回の会談だ。

テীরリス帝国が内乱を収めようとするなら、なぜ素直にミゼット国に遣いを出さず、敢えて軍事衝突という形で戦闘を引き起こしたのか。

相手がただの民衆ならばいざ知らず、彼らは立派に国家としての体裁を成している。その行動は正当な手段を踏まなかったどころか、さらに回り道をしてきたようなものだ。国家の損失を最小限にとどめる努力をするならば、全く見当違いも甚だしい手段である。

戦闘で兵を消耗し、さらに利益を差し出す事でミゼットの協力を得ても、そこから彼らは強引にティーリスの脇腹に喰いついていくのは間違いない。

するとこれは完全にティーリスの損にしかならない、得に繋がるとも考えにくい。

だとすると。そこでシグマはティーリスとミゼットの相関図を頭の中に描き出し、二つの国から離れた空白部分に、もう一つの要素を置いた。大抵、第三者の視点といくつかの材料を加えれば、面白いように絵柄は様変わりする。

さあ、損な役回りでこれほど下手な芝居をティーリスに打たせ、得をしたのは果たして誰か。

ジェスに話したのはその一端だ。彼も現在、シグマから得た一端を元に、目まぐるしい速度で事の全貌を描き出している事だろう。

自分に内乱の平定がある程度任せるとしたら、乱を収めるのは不可能ではないだろう。ティーリスも会談でシグマをミゼットに派遣して欲しいと要求している。

しかし、敢えて自分である必要がどこにあるだろうか、と思うのだ。だから、そこから思考を進め、シグマはこの内乱の原因に踏み込

んだ。

天候不順。しかも、ティーリスの国土の大部分で同時に発生した異常気象。それがどれほどの範囲に及ぶのか、彼の国で内乱の勃発以前にその気配を察知した時、調べた甲斐があったというものだった。

明らかに自然が引き起こしたのではない。断じてない。

これは確実に何者かによって引き起こされた内乱なのだと、シグ

マは信じて疑わなかった。

その根拠こそ、この土地で起こった大地の奇妙な差分だったのだ。

（「なんだありや……国境付近で地面の様子が手前と向こうでずいぶん違うぞ」）

（「干からびているだろう。ティーリス側が」）

（「いや、分かるが変だろう。こつちとあつちでそう日の照り方や土の質が違う訳がねえ。雨だって降ったはずだ」）

世界の理に干渉する者。異常気象が引き起こされたのを感じて、それをティーリスの国境まで押し戻したのは、ティーリスを窮地に陥れた彼らと同じ法を扱う者たちだ。

真に己の領分を越え、不可侵を犯したのは、果たしてどちらかおそらく聞くまでもない。シグマは確信を持って答えに辿り着いていた。

（あれらもずいぶんと堕ちたな）

呟き、口元を覆った手に隠れて、クツと唇を歪めた。

会談も終盤に差し掛かったかと思われた時、にわかに外が騒がしくなった。

「？ 何だ？」

後方でジェスがぼそりと零す。ティーリス側も異変を感じたのか、立ち上がるうとしている。

同じく腰を浮かせかけた周りの三人を制すと、シグマは横目で彼らを見やり、獰猛な気配を交えて微笑した。

「伏せておけ。来る」

言い終わるが早かったか。

外の喧騒が一瞬、不自然に途切れた。

奇妙な静寂に一同が首を傾げるより先に、シグマは副官アイネの

襟を掴み、自分諸共地面に引き倒す。

「あつ  
」

彼女が上げたはずの声は、爆風によってかき消された。

申し訳程度に視界を遮っていた天幕は呆気なく宙を舞い、舞い上がった土煙の中を陽光が微かに照らして、独特の世界を描く。

口元を服を引き上げて隠すと、シグマは隣を窺った。ジエスも無事に妹を庇って伏せたようだ。まともに爆発を喰らったのは、ミゼットの外交官とティーリス側の全員といったところだろう。

こほつ、と僅かに気管に入った塵に噎せてから顔を上げると、シグマは改めて荒々しく笑う。

「出て来たな、路地裏鼠」

「そりゃ、モグリの俺様のことを言ってるのか？ 鼻垂れ小僧。面倒な場面にせっかく登場したのに、そりゃあんまりだなあ」

笑いを含み、滑らかに男の声がする。渋みを含んだそれから、一つの道を究めた者にしか許されぬ響きが感じられた。

ざりつ、と砂利を蹴散らし、未だに立ち込める煙を吹き払って現れたのは、派手な衣装を纏った男だった。

「闖入者が 何者だ！」

近くから、苦しげながらも苛立った声が上がった。

こちら側の外交官だろうか。余計な口を挟んでくれる、とシグマは眉を潜めたが、男はにやりと凄絶に笑って、小さく口笛まで吹いてみせた。

「エリアス・トライド しがねえ翠の魔術師さ」



翠、と口にした男に、シグマは目を小さく瞠る。

翠？

「こちらの疑念を察した様子もなく、ふんぞり返る男の後ろに、大小二つの影が煙の中から現れた。

「“元”でしょう、“元”。トライド氏、過去にこだわるのは止しましょうよ」

現れたのは、ひよろりと細身でどこか飄々とした雰囲気若い男と、

「ソーソー、今となつちやただのモグリもいいところすから」  
規格外に膨れ上がった体を、折れそうなほど短く小さい足　ま  
さしく“豚足”　で支える肥満体型の、やはり女。

「黙れよテイワー、トースキン。俺はまだまだ」

言いながら、男は悪戯好きな少年のように、きゅぴん、と目を光らせる。同時に、轟、と手に持った獲物を振り回した。

凶悪な大きさの、獅子頭の“メイス”を。

「現役だぜ？」

「知ってる」

凸凹コンビは男の後ろで、それぞれ太い鉄棒と白い陶器でできた魔術師の杖を前方に突き出し。

奇天烈な魔術師三人組の、強烈に過ぎる魔法が炸裂した。

**chase - 16 : トラクの獣 (後編) (後書き)**

三人組登場！

しかし……ここで、一旦半年以上の更新ストップになります。

詳しくは活動報告にて……orz

**chase - 17 : 誰も知らない誘拐劇 (前書き)**

こっそり更新。パソコン版のレイアウトを標準に戻してみたり。

「きゃうっ！」

「うお、っと！」

爆発により勢いよくジェスの体は飛ばされ、地面に叩きつけられる。背中を強かに打った時、肺が底から揺さぶられて息が詰まった。近くにいたりザはどうにか引き寄せて守ったが、その横ではアイネが受け身を取りながらも、ジェス同様に体に伝わる衝撃で動けずにいる。

「っ シグマ!?!」

彼だけが、唯一姿が見えない。

土埃が立ち過ぎて何も分からない。武器もない。銃さえあればと悔やんだが、仕方なく袖の下から隠し持っていた軍用ナイフを引き抜いた。

これで本当に丸腰であったなら、何もできずに殺されるところだ。万が一の備えはしておくものだなと思い、冷や汗が流れる。

地面に二人を転がしたまま腰を浮かすと、中腰になったあたりでジェスはナイフを背後へ振り回した。

肉を断つ感触。そのまま伸び上がり、一呼吸で全身でナイフを相手に埋め込むとすぐさま抜いて地面に転がす。

見下ろして確認すると、ティーリス側の兵士だろうと知れた。冷静さを失って何を勘違いしたか知らないが、敵を間違えてジェスに襲いかかった時点で魔術師たちの望む通りになってくれているのだけは確かだ。

「ったく、モグリ風情がやってくれるぜ……！」

歯噛みしてナイフの刃先を乱暴に拭くと、アイネに声をかけた。

「グレイス副官、中佐と一旦本部まで退却しろ。俺はアルスミード少将を探してから戻る」

「しかし准将、それでは司令官が軍からいなくなります！」

「だーから、おまえはシグマの副官だろ、どうにかしてくれ」

「准将！」

「准将……」

リザがグレイスの隣で喘ぐ。

「公私混同も甚だしいのですわよ……！ 妹可愛さに逃がすのでしたら、私、《兄》を許しませんわ……！」

非難の声も聞かず、懐からあるだけの転移札を取り出した。将官クラスしか使えない代物だ。当然二人は札を持っていない。

「ちょうど二枚ある、使え」

「お兄様っ！」

ナイフに残っていた血糊でトラックの司令部の座標を書き殴る。転移札が吸い寄せられるようにリザとアイネの体に張り付くのを確認すると、ジエスは彼女らが消える前にその場から走り出していた。

「戻ったらお置ききですよ！」

聞こえるはずもないが、間違いなく妹がそう叫んだ気がした。一分にも満たないやり取りだったはずだが、場が完全に混乱するには十分な時間だったろう。

飛び交うのは怒号と銃弾と、魔術師の魔法による爆音、奇音。最前線に出たような乱戦具合に、嫌な懐かしさを感じる。

素早く辺りを見渡すと、ミゼット側の外交官は自分の手持ちの転移札でさっさと退避してしまっただけらしい。ティーンリス側は物陰に隠れてはいるがなぜか逃げる様子がない。軍の者は突然の襲撃に魔術師らに集中しており、ジエスが一人うろついても全く誰も気に掛ける余裕すらないようだった。

「くそ！ シグマっ、おいシグマ！ どこ」

だ、と言う途中に背後からにゅっと何者かの手が伸びた。口を塞がれて、近くの崩れた建物の影まで引つ張りこまれる。

「ここだ。……さて、面倒なことになった」

耳元でばやく声を聞いて、ジエスはしかけていた抵抗をやめた。拘束はすぐに外れたので、シグマに向き直る。

「魔術師が魔術師に介入するとろくなことになる。どさくさに紛れて逃げるにしても……」

「おい、今何だった？ 魔術師が魔術師に介入？」

「気付かなかったか、とシグマは言う。」

「ティールリスの人間は傀儡だ。意思がない上、あちら側の魔術師はトラックのあれらの介入を受けている。動かしようがなかったはずだ」

「いや、いやいやいや。初耳だぞ。何だそれ。魔術師がいたってことか？ だからティールリスの外交官が逃げなかったのか？ いや、まさか……」

シグマの蒼い目が全て肯定しているのを確認しつつ、ジェスは嫌な予想を口にした。

「まさか、この戦闘に魔連が裏で糸引いてるとか、ねえよな？」

「当たってほしくなさそうなおまえの予想だが、今の可能性は高いぞ。出てきたのがエリアス・トライドだからな。あれは数年前にも魔連といざこざを起こしている。ああ、グレイスとカリス中佐を戻したか？」

頷くと、シグマは手をこまねいた。

「ならこれからどうするかが問題だな。転移札がないから司令部にも戻れない」

「おい、持ってこなかったのか！」

ぎよつとすると、シグマは首を横に振った。

「持ってきてはいたが、外交官を逃がすのに使った」

「……おまえもか」

思わず肩が落ちた。

二人して戦場に取り残されたという構図に、ジェスは頭を抱えなくなる。思えばスヴェナ戦争以来、数えるほどしかなかった本格的な危機の一つではないか。

軍人であるシグマには国から課せられた官や国民を守るという義務はあるが、外交官を身を呈して守る程の義理はない。本来節約すべき転移札を全て渡してしまったというのは、おそらくわざとなの

だろう。

(戻る手段を断つてでもラグナを追う、か。何つーか、こいつ本当に……)

抱きかけた感想を頭を振って追い払うと、ジエスは思考を切り替えた。

「とりあえず……」

近くを走り抜けようとしていたティーリスの軍人をジエスは足に引っ掛けた。

「がっ!? 何をす」

「よつと」

手刀を肩口に叩き落として沈黙させる。目当ては彼の腰にあったサーベルだった。

「ほいシグマ、得物」

「む」

受け取ったシグマの眉が潜められた。

サーベルを軽く振って具合を確かめる腕が、ふとした瞬間に霞む。同時に、澄み切った金属音が二人の間で響いた。

「やはり重心が違うと振りにくいな」

「気になるからって周りの人間で試し切りをするか普通。鬼の子かためえは」

シグマは目を細めて笑う。

「だが、死なんだろう?」

「死なねえけどよ……普通の奴なら慣れない得物でコイツを折ったりなんぞしねえよ。十分だよ」

苦い顔でジエスは痺れる右腕を擦る。ぼつきりと半ばで折れたナイフを眺めて、溜め息混じりにそれを放り捨てた。代わりに倒れている軍人のホルダーから小銃を取り出すと、銃弾の数を確認する。そして何気なく顔を上げた時、ジエスの顔は歪んだ。

「……よお」

今までそこに居なかつたはずの人間が、視線の先で悠然と腕をこまねいて構えている。面白そうに鮮やかな翠の瞳を輝かせる彼の脇には、依然として圧倒的な存在感を有するメイスが挟まっていた。音も前触れもない、最上級の転移魔法。呼吸をするように扱われる彼のそれは、生半可な魔術師では阻害できないと言われている。

また面倒な時に面倒なものが来たと思つた。

「何の用だ」

ジェスにそう問われたエリアス・トライドは、無音で笑みを浮かべた。首を傾げた拍子に、青味を帯びた黒髪がゆるく癖をつけて肩から流れ落ちる。

「……ちよつとしたお節介だ」

答えを聞いた瞬間、ぞつと予感を覚え、ジェスは背筋を凍らせた。

「慣れないと酔うだろうが　　転移札をしょつちゆう使つてるなら、大丈夫だろう？」

さりつ　　と、男が指先を上げて描いたものは、こちらからでは裏返しになっていたものの、何であるかは確認できた。だが、それだけだった。

座標だ。どこかの、ということしか分からない。

「俺の愛弟子に会つたら教えてやってくれ。共鳴距離に制限がかか  
つてる」

「つ、これは」

シグマが隣で息を詰まらせた。気付けば、二人の足元に初めて見る複雑な光の紋様がそれぞれ展開されている。



「おい……何で飛ばされるんだ俺ら」

理不尽とはこのことを言うに違いない、とジエスは思う。転移先がどこに繋がっているのか分からないのも厄介だ。

それに対し、突然現れて二人を無理やりどこぞへ飛ばそうとしている張本人はどこかのんびりとしていた。

「気を付けるや、シグマ・アルスミード。何だか知らんが、おまえ

」

頬杖を付きながら、彼は告げた。

「魔連に狙われているからな。関わりはしてもとっ捕まるなよ」

周りの景色は、それを最後に輪郭を失って、何も目がそれと捉えられるものがなくなった。

「……なあ、シグマよ」

縫い付けられたかのように紋様の中央から離れない足に、魔法を回避するのを諦めたジエスは、ぽつりと呟いた。

「……何だ」

ジエスの声の響きに含まれるものを感じ取ってか、シグマの返事は嫌々といった様子で返ってきた。光はどんどん強くなる。

「おまえ、俺の見てない所で何人から恨み買ったんだ？」

「………」

やがて光に目を開けていられなくなった頃、シグマは顔を反らしながら、珍しいことを言った。

「悪い。巻き込んだ」

「いや、今更だけだな」

出会った当時から、既にジエスはシグマの行く道に自ら進んで巻き込まれている。

しかし、今の希望を挙げるなら、とジエスは言う。

「せめて『遅くなる』の一言でもリザに言えたら良かった。……お仕置きがどうなるか全く予想がつかん」

状況証拠も何も無い。後に二人の行方を追うためにやってくるだろう調査員たちに、ジェスは心の中で合掌した。  
(すまん。鬼畜と言われようが何でも良いから……とにかく頑張つて見つけてくれ)

\*

「あちゃー、遅れましたか。ラグナちゃんへの伝言頼もうと思ったのに」

「テイワー……おまえ、鬼畜將軍が伝書鳩に変わるようなタマだと思っただけか？」

後ろから響いた声に、トライドが振り向くと、ひよろひよろとした男が困ったような顔で、大女と共に歩いてきた。前方では既に、二人の将官を転送し終えた紋章が光を収束させつつあるところだった。

「テイワー、トースキン。おまえら向こうはもう終わったのか」

「いやあ、ものの見事に逃げられましたよ。ワイスタスタカレット藤と炎からトンスラこくなんて、すげえ逃げ足つすね。むしろ元翠エメラルドのトライド氏を見ておたこいてましたね」

「おたこくって何だ。おまえの表現は時々分からん、普通に言え、普通に」

頭を掻き掻き言ったテイワーの隣で、長身のトースキンは彼の頭を小突いた。

「トースキン、体の具合は大丈夫か」

トライドが聞くと、彼女は数分前とは打って変わってほっそりとした腕と長くなった足を組んだ。

「一応、魔法の使用量は予定の範囲内です。今度魔法を使えるのは頑張つて太つて明後日といったところですか」

「その後太り過ぎないように常にダイエットのジレンマか……。おまえ、本当に……。魔法使うと痩せ細るその体質さえなけりやもつと自由たるうに……。別嬪が勿体ねえ」

「やかましい、テイワー。万年モヤシのおまえに言われたくないわ」「俺だつてもつと肉と上背が欲しいって思ってるよ」

「……。おまえら、足して二で割つたら絶対にちようどいいよな」

「「ごめんこうむります」」

息もぴつたりと言うと、テイワーは「それで、」と続けた。

「アルスミード少将とカリス准将の二人。どこまで飛ばしたんですかね？」

うん、とトライドは頷く。

「実は、かなり大雑把に飛ばしたからな。どっかには居るだろうが、どこまでかは分からん」

「……。精度どうしたんですか。やる気出しましょうよトライド氏。ラグナちゃんに関わることでしょ」

「野郎二人分飛ばすのに精度を気にしてやる必要がどこにあるんだよ……。面倒くせえ。ちゃんと町周辺には飛ばしたから、行けるだろ」

「魔連の連中が余計なことをしなけりやいいんですがね」

テイワーが肩をすくめた。

トライドは一つ分息を止めてから、ふうつと吐き出す。

「……。アリドネか」

ミゼット国の軍人二人が飛ばされただろう方角を眺めながら、トライドは愛弟子のことを思う。

「何も起こってなきやいいんだが……。起こらない方が、おかしいよな」

あの事件以来、魔法越しに声しか交わしていない。もう五年会っていないが、どんな娘になったのだろう。

「さて、そろそろミゼットの奴らもここに乗り込んでくるだろうしな。俺らも退散するか」

メイスを持ち上げて転移の陣を描くと、テイワーとトースキンの

二人を招き寄せた。

「今度はちゃんと精度は完璧にして下さいよ。俺とトースキンがばらけますからね」

「分かってるさ」

そうして、嵐のように過ぎ去った魔術師たちの襲撃を経て。

ティーリス軍はトラクより撤退。ミゼット軍は二人の將軍の消息不明を、戻って早々に本国に知らせることとなる。

chase - 17 : 誰も知らない誘拐劇 (後書き)

そんな訳で、シグマとジエスはどこぞへ誘拐されました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3708o/>

---

鬼畜チェイス

2011年10月11日03時59分発行